

NHK学園生涯学習フェスティバル

武蔵野市短歌大会

令和元年八月二日（金）午後一時～四時
武蔵野市民文化会館（東京都武蔵野市）

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園生涯学習局長

砂押 宏行

武蔵野市長

松下 玲子

武蔵野文化事業団理事長

青木 稔

一、選者紹介

一、鼎談「わたしと短歌」

小島ゆかり・花山多佳子・穂村 弘

— 休憩 —

第二部

一、表彰

一、選評

NHK学園短歌講座監修・「未来」

岡井 隆

「コスモス」

小島ゆかり

NHK学園短歌友の会選者・「塔」

花山多佳子

NHK学園短歌講座専任講師・「心の花」

藤島 秀憲

「かばん」

穂村 弘

（五十音順）

一、当日詠「武蔵野の夏を詠む」 入選発表

NHK学園短歌講座専任講師・「心の花」

藤島 秀憲

NHK学園短歌講座専任講師・「コスモス」

松尾 祥子

総合司会 フリーキャスター

北林きく子

ごあいさつ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 武蔵野市短歌大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「野」あわせて二千二百一首にのほりました。お寄せいただいた短歌の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてください。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、短歌を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十八年に開設された短歌講座は、これまでの三十五年間に、三十四万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や短歌学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和元年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投稿いただいた皆様、ご協力をいただいた東京都・武蔵野市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年八月二日

選者のプロフィールとひとこと

(選者は五十音順)

鼎談・選者



小島ゆかり (こじま ゆかり)
昭和三十一年愛知生 「コスモス」選者・編集委員 現代歌人協会理事
短歌甲子園特別審査員 「産経歌壇」選者
歌集『憂春』『泥と青葉』『馬上』『六六魚』など



花山多佳子 (はなやま たかこ)
昭和二十三年東京生 「塔」選者
NHK学園短歌友の会選者
河北新聞「河北歌壇」選者
歌集『樹の下の椅子』『空合』『木香薔薇』『胡瓜草』など



穂村 弘 (ほむら ひろし)
昭和三十七年北海道生 「かばん」同人
「日経歌壇」選者
歌集『シンジケート』『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』『水中翼船炎上中』など
歌書『短歌という爆弾』『短歌の友人』『はじめの短歌』『世界中が夕焼け』(共著) など

平成が終わり令和の時代になったことが、多くの作品に反映されていきました。しかし、「令和」という言葉が入らなかつたらいい歌なのになあ、という作品もじつは数多くありました。本大会に限らず、今年はそのがいちばん難しいところかと思えます

頭からとかげ消えたるくさむらに鬼百合の舌ながく垂れをり

元年ということで「令和」を詠み込んだ歌が多かったのですが、歌としては安直になっていたように思います。全体的に説明過多で詰め込む傾向が見られました。もう少し読者に想像させる余地がほしかったです。題詠「野」はなつかしい情景の歌が多く心がなごみました。考へるカラス佇みそのめぐり考へてゐないムクドリ歩く

ユーモラスな文体で日常を詠った秀歌が目につきました。社会詠は多くはなかつたけれど、例外的に新元号「令和」の歌が幾つもあって印象に残りました。テーマ詠「野」については、野球、野焼き、視野など。風土を感じさせる歌が見られてよかったです。

春のプール夏のプール秋のプール冬のプールに星が降るなり

選者



岡井 隆 (おかい たかし)

昭和三年愛知生 「未来」編集・発行人

文化功労者 日本芸術院会員

NHK学園短歌講座監修 短歌友の会選者

歌集『静かな生活』『鉄の蜜蜂』『岡井隆全歌集』(全四巻) など



藤島 秀憲 (ふじしま ひでのり)

昭和三十五年埼玉生

「心の花」編集委員

NHK学園短歌講座専任講師

現代歌人協会会員

歌集『二丁目通信』『すずめ』



当日選者

松尾 祥子 (まつお しょうこ)

昭和三十四年東京生 「コスモス」選者

現代歌人協会会員

NHK学園短歌講座専任講師

歌集『風の馬』『シユプール』『月と海』など

特選以外の秀作・佳作にもいろいろいい歌がありました。自由題、題詠共に、知的な工夫をこらした歌がたくさんあり、表現の確かな歌、思い切った発想の歌もあって、読みながら愉しみました。
今日もまたばらばらつと終局は来む鉄の蜜蜂にとり囲まれて

平成が終って一か月後に締切があったからでしょう。令和を迎える歌が多くありました。私たちは今という時代に生きて歌を詠んでいるのだと改めて感じました。一方で題詠の「野」は回想の歌が多かったです。このことも「野」が減っている今という時代を表しているようです。

鍵穴を左にまわし家に入る 鍵穴まもるために仕事す

単衣から袷にかはる季節きて山鳩色のシヨールをまよふ

全作品を名前を伏せて印刷し、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきました。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大会事務局で決定いたしました。入選作品欄は都道府県別に掲載いたしました。

NHK学園武蔵野市短歌大会大賞

潜りより帰りし夫の顎髭がちりめんじゃこのように輝く

長崎県

田中光子

足の骨五十六個を励まして登るマチュピチュ降る降るひかり

福岡県

松本千恵乃

△題詠「野」▽

手をつなぐほどの若さも老いもなく妻とゆきたり花の武蔵野

愛知県

笠井忠政

武蔵野市長賞

武蔵野の農地を守る跡取りは世界の野菜シェフをうならす

新潟県

七里松枝

武蔵野文化事業団賞

野の草を摘み来しその手で螺子巻きぬぼんぼん時計春に合わせて

東京都

秋山久子

岡井 隆 選

★特選

息子住む都会にひとり旅に来て会わずに帰る
ミュシヤ展をみて

新潟県 関根 惠津子

一人旅で訪れた都会。そこに住む息子が忙しいので遠慮したのか、あるいは何か理由があつて息子に会わずに、「ミュシヤ展」を観て帰った。作者は、その展覧会で癒されたが、やはり複雑な思いなのだろう。

足の骨五十六個を励まして登るマチュピチュ
降る降るひかり

福岡県 松本 千恵乃

ペルーの都市遺跡である「マチュピチュ」。登ろうとする意欲がよく表現されていて、自らを励ますのに身体を支える足の骨を励ましていくところにユニークさが出ている。骨の個数への着眼が面白い。

題詠「野」

武蔵野の農地を守る跡取りは世界の野菜シエフをうならす

新潟県 七里 松枝

前の代もやはり、近郊農家として野菜を育てておられたのだろう。産業としての農業が難しい時代に、跡取りの野菜は世界を「うならす」。親子代々農地を守ってこられた人の達成感と誇りに共感する。

★秀作

この仕事为天職といひ青年は老人施設で車椅子押す

眼に見えぬ時間の層のその中に風の牡丹を僕は見てゐる

くり返しあやされ続く嬰兒はカエルのやうな声して笑ふ

ケイタイに未知の番号二度光り親しき人の死を知らせけり

校庭に令和、令和と手話の兎ら花咲く形を天に差し上げ

郷里の身延が映ると妻が呼ぶボツンと一軒家に嬬が一人

百舌鳴けば古墳の長き名が浮かぶ百舌鳥耳原中陵

「運転をするかしないか選択を」せんそうはないくにおはなし

もう一度ノートルダムに見えたか記念に残せるユーロを寄付す

箒持ち背中丸めたわが母がグーグルマップに現れ居たり

良い人と思われたくて言葉選るTシャツのタグちくりと痛い

蓮田より足どり重く帰りくる人のゴム長胸までを呑む

題詠「野」

野付崎にあいの風吹けばをちこちに打瀬漁する白帆のたわみ

原発の事故で生まれし魔の袋野積み八年途方に暮れる

展げれば百平米の肺の野におお葉の香る風かよわする

咲き初めしホタルブクロに生けかへる亡夫の土産の志野の花入れ

野うさぎが野いちごをつむ絵の中の野はらに子らはひねもすあそぶ

野外フェス大きな空にとけてゆくマイルスの音夏の夕暮れ

河島英五歌う歌詞のよな「野風増」が昭和の頃はここに居た

ゆつくりと指揮者がタクトを置くやうに春の野は暮れ蝶も眠りぬ

青森 種市 要司

福島 峯村琥珀山人

埼玉 武井 猛

東京 岡田 仁美

東京 久野 静代

神奈川 星野 一英

新潟 若月 昭宏

富山 浦上 紀子

石川 室木 正武

大阪 笠井くみ子

山口 相川美津江

山口 倉谷 節子

北海道 幻尽

埼玉 宮川 富次

埼玉 古谷眞利子

千葉 大内はる代

千葉 永井 逸子

東京 西林美沙子

愛媛 眞部 孝司

長崎 山下久美子

★佳作

カルピスの味が薄いの濃いのがってまた始まった嗚呼夏休み 大会の集合写真にルーペもち二〇〇〇人の中のわたしをさがす 「宿題」と孫にせかされ八十の夫〈艦砲射撃〉を初めて語る 老い母の診断おおく父と兄腕組む姿共に似ており 手に足に頭に止まる夏蝶のわれは花咲く何の木だろう 地下足袋の底をびったり地につけて土手の斜面の草を刈り取る 雪解けに家族揃って隊列を組み葉たはこの苗床を踏み 手の平が俺の名刺と百歳 <small>ひやく</small> の父固く居並ぶ鉄餅舐みせる 十代の体操選手のところ思い手足をぐんと伸ばし窓拭く ひきしめて平成最後のボランテア基石を持ちてホームへ向かふ ヤッホーとメールで近況知らせ来る中二の孫にこだまで返す 「父さんの疎開していた町だよ」と息子のメールその現場より 神保町に信号待てば春の日の記憶の奥を都電走れり あちこちに豪華列車は走りをり観光大國日本となりぬ 戦中と戦後生まれが平成に逢うて恋して令和を生きる 会場の暗い足元スマホにて見知らぬ人が照らしくれたり うらうらと陽炎もゆる春昼の宝くじ売り場に僧も並びて 記憶無き生れ故郷の室蘭の天気予報がいつも気になる 通じないトンチンカンな返事するAI機器は持ち主に似て 魂を手放すように藤棚に集う人々みな上を向く	北海道 後藤 明美 福島 橋本 愛子 茨城 岡部 千草 群馬 高山ナオミ 群馬 進在小夜子 埼玉 武井 猛 埼玉 斎藤 長光 千葉 椎名 昭雄 千葉 堀川 紀子 東京 新井 忠彦 東京 内山 郁子 東京 栗原 幸子 東京 岡本 和子 神奈川 佐久間和子 山梨 加賀美 公 長野 柴田 康代 長野 高野 秀子 愛知 真野 勝子 愛知 西村 愛美 三重 田中重紀子
--	---

題詠「野」

まだ誰も泳いでいない学校のプールひんやりぶんぶん泳ぐ 申告の会場に聞こゆ出雲弁に時おり交じるポルトガル語が 老いるとは何ぞと自問自答する数多の薬仕分けしながら 老い人の詠む恋の歌あこがれつつわれには詠めぬと手の爪を切る 決まりしと「令和」と書きしボード持ち店長さんが店内まはる —— 題詠「野」 ——	大阪 黒木 淳子 鳥根 小村ミチ子 福岡 樋口 絹子 福岡 市川登美榮 大分 後藤 史子
「新地野」とう地名を付けし頃の人思う「限界」などと言われて 太棹の撥のさばきの激しさに津軽平野の風雪を見る 「あざみ野」と家号の看板百歳が子の開店の祝に書きぬ バッタ追い幼も飛ぶが手にするはもぬけの殻の雑草ばかり ほろ苦さ隠してサラダの春野菜ドレッシングに魔法をかけて 〈この広い野原いっぱい〉鳴らしつつゴミ収集車くる九軒の村 多摩川の流れば《くの字》描きつつ武蔵野台地めぐりて海へ 料金箱の中の小銭が鳴りにけり野山を走る村営のバス オールだった阿部君訪ね来て有機野菜を下サツとくれる ビデオ持ち学芸会を見に行くも座ったままの子は野草役 プロ野球選手とわれは変わらないだって私は契約社員 朝食に即席みそ汁野菜の具いとも細かにうかんていたり 感情を染井吉野に使い切りて八重桜には注ぐものなし お辞儀してただにいただく何ひとつ手を貸さざりし藤・紫萁	岩手 菊池 陽 群馬 石坂ふさ子 埼玉 根岸恵美子 東京 高橋 澄夫 東京 美濃又清志 東京 岡本 和子 神奈川 渡辺 勲 愛知 清水 良郎 愛知 今泉 一夫 愛知 西村 愛美 京都 長尾 律子 京都 美濃部民子 鳥根 田中 勝美 山口 森田アヤ子

小島ゆかり 選

★特選

眼に見えぬ時間の層のその中に風の牡丹を僕
は見てゐる

福島県 峯村 琥珀山人

「目に見えぬ時間の層」という表現により、むしろその見えない時間の層が、ふと見えるような錯覚をもたらします。「の」を重ねるリズム、「風の牡丹」という言葉も、たいへん魅力があります。

蓮田より足どり重く帰りくる人のゴム長胸ま
でを呑む

山口県 倉谷 節子

泥深い蓮田からゆつくりと上がって、泥まみれの足を運んで歩く人の姿。その影像がありありと見えてきます。「ゴム長胸までを呑む」という簡潔でリアルな表現の力が、一首を生かしました。

題詠「野」

手をつなぐほどの若さも老いもなく妻とゆき
たり花の武蔵野

愛知県 笠井 忠政

なるほど、手をつなぐのは恋する若いカップルか、もしくははいたわり合う老年のカップル。微笑まじさと寂しさ少し。ゆつくり歩くようなテンポで「花の武蔵野」ままで。味わい深い一首です。

★秀作

朝市の店主播すれば金色のイクラ一山宙をうねれり

栃木 五十部澄子

夜中でも音を立てずにたんぼほの綿毛は空を歩くのでしよう

埼玉 岡田 美幸

幼き日あかず見上げし百合の木はまだ伸びゆくおおぞら無限

東京 山口美知子

携帯のバイブの音とウシガエルの声は似てると帰省子の言う

神奈川 岡村 還

「二〇五歳、死ねないのも困るのよ」共感しつつ令和始る

神奈川 岩船 展子

めぐらせる葦簀に透けて魚屋の奥の厨の昼餉の支度

愛知 清水 良郎

教え子の六十六歳同級会君は誰かと生徒に問わる

愛知 牧 正吾

蛇は酔う鶴は戯る虎は跳ぶ神は恋する石見の神楽

京都 長尾 律子

ふらここに立ちて少女のように漕ぐ飛びおりたいがもうおそすぎる

兵庫 竹内 安子

遺されし文箱に父の細き文字十二の吾に宛て「出張がんばる」

鳥取 入沢 由子

樹ではなく蜜柑の方が手を離し真つ逆さまに地面に落ちる

愛媛 園部 淳

潜りより帰りし夫の顎髭がちりめんじゃこのように輝く

長崎 田中 光子

題詠「野」

あの白い猫が三尺もある蛇を引きずつて野を歩いて行つた

宮城 大和 昭彦

陽炎のごとくゆらゆらゆらゆれて野火焼く人ら野火の真ん中

栃木 齊藤 宏壽

馬二頭抱擁のごと立ち上がり野髪は風になびく栗色

栃木 池上 吟

荒川の鉄橋辺りできゅつとなる母を思いて乗る武蔵野線

東京 大山 園枝

さんざしの美にふける日のブルースト思ひつつ行く野の小径かな

東京 竹本 賢治

（この広い野原いっぱい）鳴らしつつゴミ収集車くる九軒の村

東京 岡本 和子

くるくると電話に長きコードありき寡黙な上野くんが好きだった

京都 福西 直美

浅き溝のごみの中からのきゅのきゅと野あざみ伸びきて今咲かんとす

兵庫 浜畑 悦子

★佳作

この池に群るるあまたのオタマジャクシ鈴のごとくに揺れはじめたり
 赴任地の差塩に向かう磐東線「新人ですか」と前の老人
 映画館に鹿皮服の男いて三本立てなり月が明るい
 傘さして川岸歩く昼下がりヤの字つくりて燕らの飛ぶ
 手に足に頭に止まる夏蝶のわれは花咲く何の木だろう
 約束の時間が過ぎて五分経つ五時間待てた初めての恋
 地下足袋の底をびったり地につけて土手の斜面の草を刈り取る
 山吹の黄いろい睡り垂れている そろばん教室休講日なり
 辛夷咲き条件反射に百姓の虫蠢きぬ農捨てたるに
 葉にかくれ揺れるみかんの花のごと生きてはゆけぬ齢となりぬ
 ケイタイに未知の番号二度光り親しき人の死を知らせけり
 ぶりかまの奥のおくまでほしくって妻のぐちをも食べているなり
 「その内に使うその日はいつ来るの」娘に諭されてあれやこれ捨つ
 百舌鳴けば古墳の長き名が浮かぶ百舌鳥耳原中陵もずのみみはらなかのみとせき
 呼べば鳴き鳴かねば眠る目腐れの老猫尊者おいねこそんじやまた冬が来る
 五十本植えたる毎に腰のぼすほそき葱苗シャキッと立てて
 うらうらと陽炎もゆる春昼の宝くじ売り場に僧も並びて
 食事して軽口たたき終わります夫退職の今日晴れていました
 大好きな公園に行き笑う犬露のある芝キラキラ光る
 わが生まれ昭和四年のニャンコの日ニンニン忍者も寒き函館

宮城 大和 昭彦
 福島 鈴木 一功
 茨城 遠山 順子
 栃木 高村 光夫
 群馬 進在小夜子
 埼玉 加藤 健司
 埼玉 武井 猛
 埼玉 古谷眞利子
 千葉 高仲 一郎
 千葉 佐藤 陽子
 東京 岡田 仁美
 東京 新美喜代男
 神奈川 大塚 頼枝
 新潟 若月 昭宏
 石川 香城 清子
 長野 田中 純子
 長野 高野 秀子
 愛知 島田久美子
 三重 松生 彌知
 三重 中野 千鶴

木蔭出てカラスの二羽と鉢合わせ不思議な近き春の烟は
 図書館の迷路のような一角に岩波文庫の『河童』は潜む
 死んだのか死んちやだめだと言ふごとくりンリンと鳴る目覚し時計
 雪降りて山の樹形は際立ちぬ山杉、藪竹、裸木の群れ
 足の骨五十六個を励まして登るマチュピチュ降る降るひかり

題詠「野」

王のごと雉子の歩むを点景に風まであおし初なつの野は
 母馬が立つてゐるから仔の馬も草のほひのなかにゐるなり
 人も家もみな流されてどこまでも浜昼顔の咲く野となりぬ
 野はみどり山は青垣縁側に座して豆打の餅喰ひてをり
 野放図な孫も神妙に座りたり百一歳を送る読経に
 野外フェス大きな空にとけてゆくマイルスの音夏の夕暮れ
 ホルン聞き飛火野疾走する鹿の数多ければ野に風の立つ
 わが知らぬハイカラな名の野菜いう女の子一人としりとりをする
 蕨とる目の前パッと逃げてゆくあれはたしかに野うさぎだった
 料金箱の中の小銭が鳴りにけり野山を走る村営のバス
 太ももに花粉いっぱい貼り付けて野原の中の蜂の羽音
 朝食に即席みそ汁野菜の具いとも細かにうかんでいたり
 野外手のダイビングキャッチ明日からもう少し頑張ろうと思う
 野に飛ばばかはゆしされど菜畑の萑昔の葉につく天道虫にくし
 (武蔵)の字にひかれて入る天ぶら屋旬の野菜は塩でいただく

滋賀 田中 新一
 兵庫 佐竹由利子
 岡山 逸見 素行
 広島 小野 系子
 福岡 松本千恵乃
 北海道 笹島 和子
 宮城 大和 昭彦
 宮城 白井美沙子
 埼玉 近藤 章
 東京 仁戸 共代
 東京 西林美沙子
 東京 関沢由紀子
 富山 浦上 紀子
 長野 田中 純子
 愛知 清水 良郎
 愛知 松井 孝憲
 京都 美濃部民子
 大阪 松山 真弓
 岡山 高原 晴子
 愛媛 矢野 和子

花山多佳子 選

★特選

大の字になりて昼寝をする息子心も開いてい
るのだろうか

東京都 中村 千佳子

思春期の息子さんか。大の字に寝るって、うまい慣用句だとも思う。いかにも体は伸び伸びしてる感じ。でも心はどうなんだろう、と思うお母さん。その場で発した問いの率直さに打たれる。

潜りより帰りし夫の顎髭がちりめんじゃこの
ように輝く

長崎県 田中 光子

「潜り」は潜り漁なのだろう。夫の顎髭が濡れたのち、乾いてちぢれている。「ちりめんじゃこ」という比喩が独特でおもしろい。海の小魚が干上がった感じ。その輝きは、髭に象徴される夫の輝きだ。

題詠「野」

燃えさかる野焼きの向こうに老夫婦「気をつ
ける」「はい」声がきこえる

茨城県 袖山 昌子

野焼きの火の向こうに老夫婦らしい二人が見えている。土地の人でなく観光客かもしれない。やりとりの声
が火をさんで聞こえてくる。そこをとらえたのが新鮮だ。「はい」がどこか僕くて、心に残る。

★秀作

夢醒めてあなたが傍にゐたときのままの空気を眺めてゐたり

宮城 大和 昭彦

くり返しあやされ続く嬰兒はカエルのやうな声して笑ふ

埼玉 武井 猛

探してる答えがそこにあるようで積みあげた本捨てられずにいる

神奈川 白井 慶子

平成は最後とメディアもあげつらいわが夫さえも奪いてゆきぬ

神奈川 蓮見 孝子

雪の野に追はれし雉は低く翔び雪に刺さりて果てると聞きし

新潟 関 泰邦

年号は令でも令でも良しと言う学ある人ら決めたまいいけり

富山 市川 弘之

二つ三つ壁穴の開く子の部屋に古いギターのぼつんと置かる

長野 宇都宮英子

めぐらせる葦簀に透けて魚屋の奥の厨の昼餉の支度

愛知 清水 良郎

猫はタマ犬はシロとふ爺ちやんは何度飼つても同じ名にする

兵庫 大村 博子

東風に乗せわが口遊む「じんじろげ」残して逝きぬ森山加代子

島根 田中 勝美

父の罵詈浴びし記憶はうすれても故郷の橋に胸が塞ぎぬ

島根 田中 勝美

死んだのか死んぢやだめだと言ふごとくリンリンと鳴る目覚し時計

岡山 逸見 素行

題詠「野」

人も家もみな流されてどこまでも浜昼顔の咲く野となりぬ

宮城 白井美沙子

たはむれに林檎を挽ぎて放りたる土手の彼方は野の広がれり

山形 蜂谷 弘

野道ゆく母の姿に気づきたるコロがつむじ風のごと後追ふ

茨城 大熊佳世子

てのひらに野苺ひとつのせてやる吾をかあさんと呼ぶこの人に

埼玉 古谷真利子

（この広い野原いっぱい）鳴らしつつゴミ収集車くる九軒の村

東京 岡本 和子

料金箱の中の小銭が鳴りにけり野山を走る村営のバス

愛知 清水 良郎

手をつなぐほどの若さも老いもなく妻とゆきたり花の武蔵野

愛知 笠井 忠政

訪れる人なきふたりの静けさよ この曇天を野良猫がゆく

愛知 後藤三枝子

★佳作

登校の十字路に立つ警官に拳手したくなる九十四歳	岩手 小野寺弥四
若き日に教師でありし学校の跡にコスモスゆれているなり	岩手 小川 クニ
わが墓は不要と語る妹の肩の高さに光る海あり	福島 菅井 陽子
「お母さんはどう死にたい」唐突に帰省の娘が問ふ大晦日	茨城 大熊佳世子
月照らし娘と重なる雛の顔会えぬ娘は若きままにて	埼玉 寺沢 文子
クレオパトラその名に魅かれ掌に熱砂の街の真白きソープ	埼玉 松井 慶子
顔の傷問へど答へず少年はひたすら冷たき水を飲みをり	千葉 森田 満子
飛ぶ朱鷺 <small>とぎ</small> を見て喜べる少年ら声はカラスと驚き笑う	千葉 正治 伸子
ケイタイに未知の番号二度光り親しき人の死を知らせけり	東京 岡田 仁美
「父さんの疎開していた町だよ」と息子のメールその現場より	東京 栗原 幸子
はげの道降りてゆけば菩提寺に墓仕舞いせし更地がありぬ	東京 新美喜代男
一軒が更地となりて広がる路地の空低く半月白し	東京 出村 俊子
スマホ開け墓の中なる夫に見す玄関に揃えし初孫のくつ	神奈川 内藤 洋子
桑の葉を食める蚕の潮騒のごとき音なす皁月となりぬ	新潟 折居 伸
息子住む都会にひとり旅に来て会わずに帰るミュシャ展をみて	新潟 関根恵津子
定席で新聞を読む老紳士の帽子が替はる立夏の書架に	福井 永田 弘子
放棄せし荒畑目に止めスーツ着しソーラーパネルのセールスあらわる	長野 山崎 英介
自己紹介を書かせし中の一枚に「嫌いなものは教師」の字あり	愛知 高橋みどり
魂を手放すように藤棚に集う人々みな上を向く	三重 田中亜紀子
助手席から見知らぬ娘降りて来てためらいもなく子の横に立つ	兵庫 足立寿美夫

理容店補聴器外し真向いの久しき翁をじつと見つめる	和歌山 武田 達雄
カニかまに慣れ親しみて久々の法事の蟹がなんだか臭い	和歌山 中尾 加代
「いい夢を見てるといいね」微睡める山羊に少女の柔らかき声	岡山 岩藤由美子
公園のベンチに日暮れまで対話重ねし人は若く逝きたり	大分 松本トシ子
白衣着て今日は手術ねにこにことスリッパの音残し出てゆく	鹿児島 稲木 政子
—— 題詠「野」 ——	
音ひとつ聞こえず雪にうずもれる林を過ぎぬ野辺の送りは	北海道 仁尾 泰子
野望など持たずに世界を巡り来し鮪の腹に包丁入れる	宮城 斉藤 忠雄
その生を窓ガラスにて終えにけり野鳥は千里海渡り来て	栃木 齊藤 宏壽
田代島は猫が島民より多し浜辺に野辺に湧き出づること	埼玉 笠原 吉江
枯野こそ心安らくどころなれ車椅子止め母と付む	千葉 森田 満子
手離せぬ野苺のジャム母と見た最後の空のほひがまだ	東京 市川 夕夏
台風の進路聴きつつたんとと野宿の弁当つくる高ー	東京 岡本 和子
武蔵野の森にしづかに日照雨降る空をあふる塩のかがやき	東京 嶋田 恵一
野菜食え無理強いするのどうかなあその子の前世きつとライオン	神奈川 笠原 隆司
視野という狭き野原に遊ばせておさなごに読む野ねずみの本	神奈川 高松紗都子
些かの野心を胸に八十年妻が頼りの六畳暮し	神奈川 守安 雄介
旅先の宿に目覚めし朝七時「野ばら」の曲が街に流るる	愛知 三好 ゆふ
亡き父を偲べば聞こゆたくましく野太き声はまだ生きている	愛知 原田 照恵
一枚の厚きガラスに仕切られてテレビのように吹雪く野のあり	岡山 岡田 耕平
ふるさとの野面を染める夕焼の猪鍋の臭い思ほゆ	愛媛 岡田千代子

藤島 秀憲 選

★特選

ふるさとは若葉の匂う溪ならん令和の初夏を
のぼるはつ鮎

鳥取県 柳谷 保

作者が自分のふるさとを「今頃は…」と想像していると読みました。匂う若葉も遡上する鮎も成長の途中です。美しいけれど、たくましい命です。凜とした調べに乗って力強い命が歌われています。

十代の体操選手のころ思い手足をぐんと伸ばし窓拭く

千葉県 堀川 紀子

体だけではなく、心も伸ばそうと自分で自分を励ましています。「十代の体操選手」という過去の具体と「窓拭く」という現在の具体、ふたつの具体が効果的に使われて、ユーモアが嬉しい一首です。

車窓よりいつも見る野を歩きたい 子犬をつれてそよ風つれて

大分県 後藤 史子

素直で、それでいて詩的な表現が魅力的な一首です。軽やかな言葉づかいが心地よく、まるで「そよ風」のように。歌に誘われて「わたしも野を歩いてみたい」と思う読者がいることでしょう。

★秀作

カルピスの味が薄いの濃いのもってまた始まった嗚呼夏休み

シロカクロか警察官に問われてる路地に逃げたる犬の毛色を

地下足袋の底をびったり地につけて土手の斜面の草を刈り取る

この春の桜見せんと夫を乗せ中央通りを何度も走る

千羽鶴リサイクルした再生紙 点々とあるおりがみの色

息子住む都会にひとり旅に来て会わずに帰るミュシャ展をみて

五十本植えたる毎に腰のぼすほそき葱苗シャキッと立てて

田植機は十連休の水張田の水面の空に苗を植えゆく

けふもまた郵便受に何もなく格子戸越しの地球は青し

神ならぬ身もて踏み込む領域か胃瘦造設今日もしており

看護師の熱きタオルに蘇り光り湧き立つ雲の峰見る

決まりしと「令和」と書きしボード持ち店長さんが店内まはる

震災のガイドの話聞きながら子らは野の花ふまずに歩く

てのひらに野苺ひとつのせてやる吾をかあさんと呼ぶこの人に

見た目には野山も里も変りなく立入禁止の札に阻まれ

野沢菜の「おやき」を母が食べたと言いを無視した黒部の旅に

オールーだった阿部君訪ね来て有機野菜を下サツとくれる

この服も痩せたら着れるこれだつてクローゼットに野望が詰まる

真つ白なシューズが一人加わりて団塊世代が春野を駆けける

野生の猿出没するとうホテルにて戸締り厳重の注意を受くる

北海道 後藤 明美

埼玉 鈴木 照興

埼玉 武井 猛

東京 山室美代子

東京 西林美沙子

新潟 関根恵津子

長野 田中 純子

大阪 山口佐智子

大阪 辻 修一

和歌山 木下 正博

広島 石口 史子

大分 後藤 史子

山形 村上 秀夫

埼玉 古谷真利子

愛知 伊藤 忠男

愛知 細川 延子

愛知 今泉 一夫

和歌山 中尾 加代

徳島 小畑 定弘

福岡 泉谷 陽子

★佳作

- 日曜の校庭に来て雲梯にぶら下がってみる低目のところ
 赴任地の差塩に向かう磐東線「新人ですか」と前の老人
 それぞれの移転先を窓に貼りプレハブ店舗はみんな空っぽ
 いただきし筈入りの夕ごはん妻に軽めのお代りたのむ
 そんなことやはりあつたね平成の回顧番組妻と眺めて
 山吹の黄いろい睡り垂れている そろばん教室休講日なり
 意味不明理解不能を意味します さあ一緒に「独特の世界観」
 れんぎょうの鮮やかな黄開きいて飛び来る鳥の影はずむなり
 朝食の片付けしつ昼食の献立迷う 妻よ良くなれ
 校庭に令和、令和と手話の児ら花咲く形を天に差し上ぐ
 境内の桜の花に送られて家々巡る子どもの神輿
 「運転をしないか選択を」せんそうはないくにのおはなし
 葬儀終え皆帰りたる式場に耳澄ませれば鶯の鳴く
 今までに幾度わたしを救ひしかその彼われを〈旧友〉といふ
 オートバイの一団走る五月晴荷台に泳ぐミニこいのぼり
 教え子の六十六歳同級会君は誰かと生徒に問わる
 ハイよりもハァーイと鼻声出すだけで明るくなれた夫との一日
 赤ちゃんにベビーカーから見詰められレジを待つわれ忍者になりぬ
 箒持ち背中丸めたわが母がグーグルマップに現れ居たり
 気まずさを残して別れ二週間ランキュラスが母より届く

宮城 白井美沙子
 福島 鈴木 一功
 栃木 齊藤 宏壽
 栃木 押久保 準
 群馬 天田 勝元
 埼玉 古谷真利子
 東京 さとうすみこ
 東京 栗原 良子
 東京 渡辺 進
 東京 久野 静代
 神奈川 中村久仁江
 富山 浦上 紀子
 石川 池本 青山
 長野 関 啓
 岐阜 永井 久子
 愛知 牧 正吾
 愛知 後藤三枝子
 愛知 近藤 峯子
 大阪 笠井くみ子
 広島 上田千津子

- 寂しいと人は楯円に眠りいる鳥の記憶は知らないけれど
 「雨降るよ」吾の忠告をきかぬゆゑビニール傘のふえる傘立て
 三つ目の元号習ふ愛用の硯も減りて窪み愛ほし
 足の骨五十六個を励まして登るマチュピチュ降る降るひかり
 潜りより帰りし夫の顎髭がちりめんじゃこのように輝く
 題詠「野」
 春の野で花摘むように老いの身にときめく心まだありて日々
 野望など持たずに世界を巡り来し鮪の腹に包丁入れる
 新緑に混じりて野生のフジの咲く小出監督送る斎場
 道の駅に朝採れ野菜を購いぬあの人この人娘の分も
 あをぞらに野鳩啼くこゑ透きとほり朝の厨に梅漬け終へる
 視野探る反射を探る器械もて免許更新査定されをり
 野の草を摘み来しその手で螺子巻きぬぼんぼん時計春に合わせて
 ほの暗い野崎米屋の店先に精米の香のやわらかくあり
 リハビリの成果ありやと釣り竿の夫を迎える片野海岸
 幼子と「ハイジ」のビデオに見入りたり吾も故郷の野と山がすき
 恵那山の裾野に建つとふりニア駅ひなびし里を思ひて眠る
 手をつなぐほどの若さも老いもなく妻とゆきたり花の武蔵野
 宇野千代の生家の庭を掃きおれば紋白蝶のふいに現わる
 野に山へ出かける母が竹の子はあるかと今日も電話して来る
 野良仕事終えて背中を流し合う老い妻とわれを覗く眉月

愛媛 丸山 香苗
 福岡 荷福 節子
 福岡 桐山 甫
 福岡 松本千恵乃
 長崎 田中 光子
 北海道 山本 隼子
 宮城 斉藤 忠雄
 茨城 田中 久子
 栃木 小原 恵美
 埼玉 長野 徑子
 千葉 小手川治夫
 東京 秋山 久子
 東京 増田美恵子
 石川 越田 峰子
 福井 興法 恵
 岐阜 吉田 順代
 愛知 笠井 忠政
 山口 相川美津江
 熊本 沖田須磨子
 鹿児島 大島 安徳

穂村 弘 選

★特選

齒の治療に水の詰りて咽びたり生けるかぎり
挑戦者われ

岡山県 片山 知子

「齒の治療に水の詰りて咽びたり」とは些細なことのようだが、一歩間違えたら大事になりかねない。そこからの転換の大きさに魅力を感じた。「生けるかぎり挑戦者われ」とまで踏み込んだことで一首が輝いた。

足の骨五十六個を励まして登るマチュピチュ
降る降るひかり

福岡県 松本 千恵乃

インカ帝国の遺跡へ登る旅なのだろう。「足の骨五十六個」というユニークな表現には墓などの遺物からの連想があるのかもしれない。その上句と特徴的な遺跡名を生かした下句が響きあっている。

題詠「野」

野の草を摘み来しその手で螺子巻きぬぼんぼ
ん時計春に合わせて

東京都 秋山 久子

季節の巡りという自然の時間と時計が示す社会の時間、その二重性の中に我々の暮らしがある。だが、作中の「ぼんぼん時計」には、1から12までの数字の代わり四季が刻まれているようだ。その大らかさの魅力。

★秀作

登校の十字路に立つ警官に挙手したくなる九十四歳

岩手 小野寺弥四

夢醒めてあなたが傍にゐたときのままの空気を眺めてゐたり

宮城 大和 昭彦

大会の集合写真にルーペもち二〇〇〇人の中のわたしをさがす

福島 橋本 愛子

わが墓は不要と語る妹の肩の高さに光る海あり

福島 菅井 陽子

小夜更けてCAへ顎外れたとスperl怪しいメモがき渡す

東京 佐野 一郎

ひと夜にて令和となるも変らざりくもりて鈍き朝のひかりよ

東京 市毛 信子

うとうととしながら書きしノートには雪の結晶のような文字ならば

愛知 野田 幸子

猫はタマ犬はシロとふ爺ちやんは何度飼つても同じ名にする

兵庫 大村 博子

雨の日に拾いし三毛猫雨の日は身の上話を聴かせておくれ

和歌山 赤松 伴子

カニかまに慣れ親しみて久々の法事の蟹がなんだか臭い

和歌山 中尾 加代

「いい夢を見てるといいね」微睡める山羊に少女の柔らかき声

岡山 岩藤由美子

潜りより帰りし夫の顎髭がちりめんじゃこのように輝く

長崎 田中 光子

題詠「野」

雨音をぬつて野音の音聞こゆ耳をすませばまた雨の音

北海道 大原 廣子

あの白い猫が三尺もある蛇を引きずつて野を歩いて行つた

宮城 大和 昭彦

白と黒の鍵盤にいま風生まれ小犬駈けゆくピアノは夏野

秋田 鈴木 仁

わたくしでよかつたろうか動けざる犬の最後の視野に在りしが

千葉 正治 伸子

往來のバスから写真を撮られたと野良着の母が言ひし日のあり

東京 岩上 夏樹

わが知らぬハイカラな名の野菜いう女の子二人としりとりをする

富山 浦上 紀子

料金箱の中の小銭が鳴りにけり野山を走る村営のバス

愛知 清水 良郎

手をつなぐほどの若さも老いもなく妻とゆきたり花の武蔵野

愛知 笠井 忠政

★佳作

大根を店梯子して買う術をミッキーマウス好きの母より	北海道	高本	智宏
この池に群るるあまたのオタマジャクシ鈴のごとくに揺れはじめたり	宮城	大和	昭彦
映画館に鹿皮服の男いて三本立てなり月が明る	茨城	遠山	順子
七分咲きの花見場所取りみすばらし寒い眠たい煙い寂しい	栃木	藤本みやこ	
夜中でも音を立てずにたんぼの綿毛は空を歩くのでしよう	埼玉	岡田	美幸
ふるさとを「今居る場所」と詠む短歌が心に沁みるわれも根無し草	埼玉	笠原	吉江
あへて席離して座ることもある君とわれとはり親等なり	埼玉	伊丹	慶子
促されちりめん本に触れ居れば窓のさくらは夜雨に清し	埼玉	齋藤	正秀
ケイタイに未知の番号二度光り親しき人の死を知らせけり	東京	岡田	仁美
いっせいにセーラー服を衣替え紺から白へまぶしかつた日	東京	半田たつ子	
武蔵野に夏来にけらししろたえの蝶とまりくれば帽うごかさず	東京	服部	秀星
百舌鳴けば古墳の長き名が浮かぶ百舌鳥耳原中陵 <small>もずのみみはらかなのみささぎ</small>	新潟	若月	昭宏
うらうらと陽炎もゆる春昼の宝くじ売り場に僧も並びて	長野	高野	秀子
めぐらせる葦簀に透けて魚屋の奥の厨の昼餉の支度	愛知	清水	良郎
赤と黒のびつしり折線グラフ見て車掌はテキパキ乗換告げたり	愛知	真野	勝子
ヤングコーンうずら卵に海老ホタテ 八宝菜のような一日	京都	福西	直美
植物に心はありやと問う子供答に窮するラジオの先生	大阪	金子	公宥
図書館の迷路のような一角に岩波文庫の『河童』は潜む	兵庫	佐竹由利子	
ふらここに立ちて少女のように漕ぐ飛びおりたいがもうおそすぎる	兵庫	竹内	安子
F Mをエアチェックしたカセットを君に貰った自転車置き場	和歌山	中尾	加代

納豆の容器の底はもうちよつとごつくすべきよいつも突き刺す	和歌山	中尾	加代
三月に入りて足の紫の冬のしるしが消えてゆきたり	鳥根	田中	勝美
酷暑の日生あるうちに会いたくてと八十歳の教え子の来る	広島	田頭	律子
波の日も寡黙に岩場住んでいる海鼠は想う水母はどこだ	山口	松浦美智子	
漁へゆくわが船岬に消ゆるまで妻が手旗の「ゴブジデ」の見ゆ	鹿児島	大島	安徳
—— 題詠「野」 ——			
音ひとつ聞こえず雪にうずもれる林を過ぎぬ野辺の送りは	北海道	仁尾	泰子
陽炎のごとくゆらゆらゆらゆれて野火焼く人ら野火の真ん中	栃木	齋藤	宏壽
その生を窓ガラスにて終えにけり野鳥は千里海渡り来て	栃木	齋藤	宏壽
川岸の野では狭しと駆け回る色んな形の飼いだたちよ	埼玉	岡田	美幸
武蔵野の森に沈みゆく目を眺む明日のことは何も思はず	埼玉	吉野	テル
手離せぬ野苺のジャム母と見た最後の空のにはひがまだ	東京	市川	夕夏
角巻 <small>かくまき</small> に病む児包みて馬糧で根釧原野をひた走りゆく	東京	服部	敏子
〈この広い野原いっぱい〉鳴らしつつゴミ収集車くる九軒の村	東京	岡本	和子
「紫のほふ武蔵野」の遊戯せり昭和十年代の運動会に	東京	松井	翠子
オール1だった阿部君訪ね来て有機野菜を下サツとくれる	愛知	今泉	一夫
夕暮れをあの子は帰る春の野に摘んだたんぼ置き去りにして	京都	中村	愛
黒潮の巨船うごかず望楼の芝は芽ぐみて土やわらかし	和歌山	木下	正博
夕焼けを使い切るまで畑打ちて戻りし夫の泥はねの顔	和歌山	小池満里子	
老の坂一つ越えるか夕焼の野は明るくて何かがあると	大分	矢野未代子	

入選

北海道

ドロの木の樹皮の文様十字なり「麓郷の森」の一隅しめる

佐藤 昭子

ぼつぼつと胸に樹雨の降りつづき折れぬ心をわれは持ちたし

田上コト子

ビル風に身をすくませて歩みつづくと見上ぐれば残月淡し

仁尾 泰子

タンジヨウビオメデトウ幼の声はしっかりと日本語なりき国際電話

林 林子

想像と反対の事 想像もしなかった事 どっさり 人生

樋口 幸子

廃校の音楽室のオルゴール不意に奏でる「ふるさと」の歌

藤林 正則

藤棚の近くで茶会はじめると野良の小猫が二匹近づくと

宗片勢津子

……………題詠……………

ブーメランで青空に輪を描くように野原を駆ける裸馬あり

高井 瑞枝

初めての野を踏みしめて歩く孫幾度もころび泣かずに起きる

田上コト子

夕焼けのボタ山の影芒野の石炭駅の廃線日来る

田辺 昭信

空知野に志文とふ駅ありきそに降りし五歳の時思ふ

富家喜代子

氷河期の地層の残る最果ての広野に草食む三千の牛

藤林 正則

凍りたる根釧原野に水流るる音さはやかに水芭蕉咲く

米島 米三

青森県

春浅くときをり雪の降る卯月納税通知書ドアより来たり

大野あつ子

広島にふらりと旅せし娘婚「つるし折り鶴」われに携ふ

大野あつ子

なつの陽が乱反射して顔半分ネアンデルタール人となりゆく

木立 徹

アンカーが第一走者のふりをして走り続ける五月の猛暑

佐々木絵理子

定年後夫に二台の愛車あり赤きトラクター白の軽トラ

佐々木芽美

逆上がりくり返す子は青空に触れたる足に気付くのだらう

中里茉莉子

疲れたと言えば不機嫌になる夫を横目で見ては言葉のみ込む

野崎 和子

二つまで持つかと母の言はれしが八十路を過ぎて妻の手を引く

福士 謙二

……………題詠……………

風もまた老いて穏やかに吹きわたり枯野は生まれ変わる日を待つ

木立 徹

玄関に野菜置かるる土地に住み今朝は土付き小松菜おかる

種市 要司

裏木戸に時に漂ふ野の香りシロツメクサの風となりしや

宮川 雅子

岩手県

……………題詠……………

川岸で兄と二人で野いちごを並んで食べた遠き思い出

小川 クニ

一坪の空き地にルールあるごとし五月は五月の野の花が咲く

貝沼 正子

濃さを増す緑の野山の底辺を馬溯川行く北へ北へと

南館 増子

宮城県

吹く風にしだれ桜の枝ゆれて倉の白壁にかけ絵のごとし

齋藤美和子

終点に降りにしわれを置き去りに〈回送〉点灯バスは発車す

白井美沙子

杉山の伐採の後荒れはてて山に次代の杉植えられず

白石 治男

ほんとうのほんとうの理由は聞けなくて林檎の紅き皮に刃を当つ

原 真知子

カモの群れ春日きらめく湖に輪を描きつつ流れゆく昼

安井 敦子

……………題詠……………

しんしんと桜かくしの雪はふり冷えにぞ冷えし野の山ざくら

遠山 勝雄

秋田県

北海道が九州よりも暑き今日不気味に大きおほろ月出る

大友 孝子

佐世保についた孫のラインは簡潔で練習船の大き写真と

北嶋 啓子

アンドロメダ銀河と天の川銀河たがいの声を聞きいる夜長

鈴木 仁

ぜんまいを摘みふる山に散る桜見とれて座る土あたたかし
..... 題詠

ひとしきり桜散り敷く沼の面に野鴨競ひて輪を描くあはれ
手を挙げて野を焼き帰る父の踵つ夕陽へ続く田中の路に
下村 清
下村 清

山形県

かくれんぼ覚え初めたる三歳はすぐにかくれる見付けやすきに
神主のかけ声に始む「泣き相撲」笑顔の孫は負けてしまひぬ
今はまだ君の脳はしゃらばらで共に笑いてきよの青空
富樫 桂子
名取 榮子

退職後連休のみの十二年休めど進む来世への旅
酸っぱさの強かった時代夏みかんに砂糖をかけて食べていた母
三浦 正
村上 秀夫

..... 題詠

タンポポのわたげと共に空へ飛ぶ「うさぎの野のちゃん」マイ創作童話
左手に赤き橋見え車には葛の香入り来庄内平野
安部 重子
五十嵐春朔

友のゐる野越え山越え二十キロ短足われが完歩し得たり
ぬばたまの夜をびよんびよん跳ぶ光に怯え泣きにき幼のわれは
大沼二三枝
名取 榮子

福島県

俵殿お元氣ですか当方はつつがなきまま老けてきました
夫在らぬ事にも慣れて電灯の夜光塗料のひも闇に光る
菊池 重堅
草野 美子

あかあかと検査「合格」スタンプは汚染地の産を印すレット
今年また桜を仰ぐいのちありゆきて惜しまん花の降る午後
田中 英敏
芳賀 ナツ

..... 題詠

折々に野菜持ちくれし友のあり種まく春の近づき思う
野や山の農作業中昼食後昼寝があった家族みんなに
小林 綾子
鈴木 一功

野ばら咲く頃が豆蒔く節なりと教へ給ひし義母いま病める
水野 滋子

早春の荒ぶる風に雲の影野を翳らせて次々とゆく
..... 茨城県

わが町の名に似た車と二十年桜の下ゆく最後の走り
水張田くじら泳ぎて波立てり雲よお願いそのままできて
待ち合わせしていないのにお互いに捜していたと笑い合う夜
大曾根文子
大森 勝代

まつ白いページに記したけふのこと令和元年五月スタート
留守番に行きて絵本の読み聞かせ「だるまさん」は三回読みたり
黒澤 正則
下田尾三乃

躊躇の水の温める昼下り二羽の雀が姦しく浴ぶ
何年ぶり娘の煮たロールキャベツに生き返る今日は私の何の記念日
田中 久子
遠山 順子

..... 題詠

先生はこの生まれ？と良く訊かれ長野訛りは捨てたるはずに
物置きに少年野球のグローブが迷子のやうに置かれてあたり
岩瀬 悦子
大曾根文子

畝きりて種芋植える昼さがり野うさぎ二匹まを跳ねゆく
『ぐりとぐら』野ネズミとなり孫に読むじいじとばあばの初共演
岡部 千草
草間 とし

雨晴るる関東平野その果てに紫峰つくばね裾長く曳く
陽に萌える土の匂いに急かされて予定外なり馬鈴薯を蒔く
小里 雪江

茅葺きの野菜畑の古民家に格子窓よりお勝手への風
松本 住江

栃木県

サンガラス取れば一面向日葵の黄の海となり我を呑み込む
一本の電話拒みて運ひとつ逃せし岐路もわれの選択
青木 一夫
池上 吟

三鷹へと中央通りの葉桜が一瞬ゆれた。きつと猫バス。
大木を上りて咲きし藤の花は高き空よりしだれて見せる
小原 恵美
小林 博

余るはずのない部品が一つ残りにて設置し電灯立派に灯る
ひとりだと私こんなに泣けるのに貴方といると笑ってしまふ
齊藤 宏壽
中村 葉子

.....題詠.....

手作りの和紙の山立つ野外劇時代絵巻に町が酔いおり

アムトラックの放つ警笛やはらかにベンシルバニアの広野までゆく

那須野原伏流水の湧くふるさは梅花藻ゆらぎ糸魚棲む

猫二匹草抜く夫を眺めてる野原の様なわが家の庭で

群馬県

頼られるうちが花だと励まされ爺婆の子守り始まる四月

孫呉るカラフルな絵で一杯の手紙には「Love You」の文字のあり

一〇〇日後生まれ変わって生きるため無心に遊ぶ赤血球は

ひらきたる野あざみの花それぞれに紋白蝶が蜜を吸いおり

寝転びてしばらく空を眺めてた練習不足の十キロマラソン

ぼったりと白八重椿の花落ちて枝の透き間に小さき青空

.....題詠.....

荒れ畑を耕す人も老いし今枯れ野に光るソーラーパネルは

朝一番野良に出て来て胡瓜もぐ吾の朝採りを待つ客のあり

剝製のまなこにつる青き空鷹の時間の静かなる冬

空の青木木の緑の他はなし万座温泉に野天の湯浴み

蒲公英の咲く野に座り肩を組み友は笑いぬ写真のなかに

自転車と一緒に乗れる上毛電鉄は車輪軋ませ効野を走る

埼玉県

我が妻はクラス委員を六十年今日も優しく厳しく論ず

一つずつ仕事を覚え葉桜にノンアルコールの吾の歓迎会

薔薇とバラさくらに Sakura 4色で文字が描ける日本語楽し

少女らの歌声ひびく公園のジャングルジムに笑顔が四つ

青木 一夫

五十部澄子

増淵 等

渡辺 典子

井田 徳子

大塚とみこ

桑原 環世

田村 節子

松村 蔚

矢嶋 とし

新井美智代

井田 徳子

進在小夜子

松下 昭代

松村 公子

松村 蔚

石綿 光一

岩本 実佳

うらみち

太田 裕子

息吹けどびくともしない風船を孫はぶうつと老いをまた知る

食卓に孫の折りたる鶴八羽 正月の膳に幸はこぶごと

ひとすじに頂きまでのもえぎいろ猛々しい竹は山を侵蝕す

雄国山麓春まだ遠く本家あり分家ありしに 七十路を行く

山里の桜の下の菜蝶めし輪になり食べる巨樹巡りかな

駄菓子買のお孫さんにと聞かれればええと微笑む孫はいないが

うらうらとうらうらうらと子子の浮かべ沈むらうらうらうと

端午の日鯉の幟はあげずして落人の里密かに祝ふ

悲しみも幸せのうち八十年天折の母にまもられ生きたり

姑とふ字見ながら不思議なりわれみづからをかく思はざりき

早朝の山裾の道の立札の「熊出没」をおづおづ見つむ

曾孫に会ひて抱きたき一心に歩み来たり跛の母

軍畑大橋ゆけば俄にも風は合戦のこえを響もす

哲学を軽蔑するのが哲学と一歩進んだバスカルの言

百キロも離る場所から無事戻る初出場のレースに鳩は

.....題詠.....

道変えて野良猫二匹庭に来る用足し昼寝しどこかに消える

晴れわたる小学校の運動会野にもひびけりつばなもゆれて

白梅のこぼるる野辺の日だまりに「合意ならず」の記事を読みつく

水無月の雨上がり待ち電柱に野鳩が胸をふくらませ啼く

野良猫のお礼だろうか玄関にネズミの死がい横たわる朝

武蔵野の雑木林のやはらかにぐがねしろがね芽吹き箔なす

小松菜に紛れて来たのか一匹の天道虫が厨に遊ぶ

連作を避けて畑に種を播くカラス見てをり土深くせり

小川 悦子

河原 敏子

河原 敏子

斎藤 長光

斎藤 長光

坂田みつ江

鳥崎 征介

鈴木 武次

中門 和子

豊島ゆきこ

根岸恵美子

林 直子

古谷眞利子

益子 浩一

若山 巖

小川 悦子

神田 絢子

齋藤 正秀

斎藤 正秀

斎藤 正秀

斎藤 正秀

斎藤 正秀

斎藤 正秀

野に繁る雑草すべてに名があると云ひ賜ひたる昭和天皇

坂道に咲く一輪の野のすみれ手で触れたくて車椅子とめる

旧姓にありたる「野」とはれんげ咲くあの町のことか日がな遊びき

まじろみに起きて又聞く雉子の声青麦の広がり野山の近し

学業を捨てて銃とり野を駆けた若き日夢に卒寿となりても

千葉県

眼つむりて電車に座せばよそ人の生のひとこま自づと聞こゆ

朝差しし傘を広げて日傘代りほがらなりけり下校の児らは

印旛沼浅瀬のプール幼な等は鮎と一緒に泳いで育つ

驚嘆の声を三度も聞くからに我に激似の人のいるらし

金の長いネックレスして出で来しが通りすがりの犬の目と逢ふ

待合室に小さな海を与えられ患者を癒す熱帯魚たち

いいじゃない妻、母、仕事それなりに熟した後は日溜りベンチ

鋭き芯に並べられたる鉛筆の詩作うながす春は来たれり

一夜にて父編みくれし藁沓の赤き縁どり朝日に映ゆる

若き嫁が私の蒔いた蕪の芽が出たと裏から叫んで知らず

をんどりの不自然きはまる足遣ひ鶏冠が揺れる何を悩むや

水底をコンクリートで固めたる鯉しか棲まぬ池に花影

花散らし枯木に戻る梅の木を啓蟄の雨がしづかに濡らす

梅まつりの箏の演奏のさなか鳴るスマホの着信うぐひすのこゑ

花冷えの爛酒の窓に見ゆるもの屋根に腹這ふ職人の影

萌ゆる春は百メートルを全力で走り切りたる選手の息吹

血の色のムンクの雲は人々を「叫び」の裡へ連れ戻しゆく

一時の雨に打たれし芍薬の首うなだれて淡き匂いす

中門 和子

寺沢 文子

豊島ゆきこ

中里 勝江

宮川 富次

一戸 光代

岩崎 勝

大谷 照

川口由美子

神崎クニ子

葛岡 昭男

近藤 クニ

齋藤 淑子

佐藤 栄子

篠崎 伸子

高仲 一郎

高仲 一郎

高仲 一郎

高仲 一郎

高仲 一郎

高仲 一郎

塚越 房子

辻 和子

戦後期の闇市の面影残す商店街ハモニカ横丁賑はひてをり

汗かきの夫のにおいをそれとなく気遣う時の犬になる鼻

飛び越して越せぬわけではないけれど無理をせぬのが老いの分別

もつこりと土を蹴上げし露のたう春浅き土手にみどりの帽子

故郷の森がダム湖に沈みしと木片削り昆虫を彫る男

遠富士を背景にせるオクラ花わがベランダに満開となる

春帽子萌黄色のせ人力車浅草界隈をひたひたゆけり

カラオケにシャワー浴びたる心地して友と別れる黄昏れの中

神様に上目遣いで合図するように誰かにやさしくしてる

なが病みの夫送りにて三十年ミシンとわかれデイサーブスに通う

.....題詠.....

野の花を競って編みし首飾り子等の顔浮く夏の夕暮

朝露に光る広野の尽くところ見え隠れして雉子歩めり

野薊みは蜂の優しいキスを待つ丁度昔のわたしのやうに

長靴にぬかるみ初めし畦道をじゅぶじゅぶ歩く春の音連れて

静止画のごとく佇む空き家からバサリ飛び立つ一羽の野鳥

二年前上野の森に生まれたるパンダのシャンシャンますます元気

太陽は核融合の賜と野に大の字の我は蟻んこ

公園の野草の強き生命力余世に欲しきこの勢いを

青春の苦さと違う路のとう野の日溜りに三つ膨める

野焼あと野原一面早蕨の子等伸び上がりラジオ体操

幼少から野球の好きな夫の言う巨人が勝つと「カニ食べに行こ」と

アカシアにハンモック吊り毛虫とり野あそびしたる母若き頃

野の薔薇をたたいて散らすかへりみち父の容態予断許さず

長谷川祐次

毘舍利愛子

毘舍利道弘

古山 春枝

野上 れい

八木 健輔

山崎 蓉子

山本 一成

ミラサカクシラ

横山与志乃

石塚 スカ

岩崎 勝

大槻 裕子

沖田 妙子

川口由美子

神崎クニ子

國武 浩之

小守倉うた子

近藤 クニ

佐藤 栄子

関口 靖子

高田 睦子

高仲 一郎

色あせし枯野にひとつ麦帽子ちさき陽だまりこだけに夏

高仲 一郎

曼珠沙華つづく畦道たどりゆく森へ森へと招かれるまま

北澤 邦子

空港の周囲の野犬は捕獲され天敵滅りて狸増えたり

高仲 一郎

通勤車内に立ち位置見つけそなた爪先男子の靴につかまる

蔵田 道子

昏き灯を線路に零し眉月の津和野路をゆく一輛電車

高仲 一郎

高温の油にドーナツ膨らめりわたしは段々小さくなるのに

栗原 良子

旨いから虫がかじると言う姉の作る野菜は確かに旨い

毘舍利愛子

遠き日の万葉講座ふつつとノート四冊令和に開く

小泉 幸子

春めきて安房の山野は芽吹きけり椎の若葉の盛り上がりてみゆ

古山 春枝

水無月のくちなし甘く香りくるその空間にTシャツを干す

古閑 麗子

午後五時の町シューベルトの曲流れ「野ばら」に合わせ子ら帰宅せり

堀川 紀子

太陽がビルとビルとの狭間より差してようやく我が家の夜明け

小島知恵子

富士一点重くありしが武蔵野の雉子一声の動体視力

三階 游

垂れこめてひもの屋の軒借りたれば明るむ先に漁船の昼寝

五味ひづる

山峡にひろがり咲けるそばの花雪原のごと光まばゆし

野上 れい

境内の堂鳩きじ鳩5羽6羽思案しながら足もとに来つ

近藤精一杯

野の花を朝のテーブルに活けるくせ母から我に我から孫へ

森 順子

駿河路を歴女三人旅をする気分はいずれも征夷大將軍

佐々木節子

朝鮮に生れ九州に育ちたり筑紫野に果つるは私の定めか

八木 健輔

少女期の窓辺に吹きし笛の音のいま七十路の空に流れる

定留 温子

重たげに揺れる枝さき見あげればミモザは光の粒子つけおり

秋山 久子

外科医師は日に数件のオベコなす夕餉の焼肉したたる赤身

佐藤 春夫

早起きし蚊遣火腰にぶらさげて草取るわれは盗人のごと

荒井 幸子

バギー押す育メン降りてバギーひく育メン乗れりラッシュの前に

四野宮和之

評判のイルミネーション見に来たり家族、カップル ぼつりと私

石田 邦子

十七歳夢二と別れた雪坊が短歌に生きてあゆみ社残す

鈴木 正作

日盛りの石に動かぬ縞蜥蜴まばたくひまに消えてをりたり

石原 由利

悲しくて明るい調べ雄雌のどちらでもあるみみずの唄は

関沢由紀子

鳩鳥の潜るにあはせ息止める三つの子を乗せスワン揺蕩ふ

市川 夕夏

井の頭公園は秋きみ想ふ金の楽器の破片踏みつつ

高橋なみ子

夕暮れの卵の花香る井の頭象の花子のまた啼かむかも

大川 嘉子

「頼んだよ」今わの際の母の言う「はい」とも言えず「ダメ」とも言えず

高橋 紀子

休日のポストは満腹ピザ・チキン・寿司エトセトラの宅配ちらし

太田 公子

機械の差し出す舌に触れてゆく我ら一団の信徒にも似る

竹本 賢治

呼びかけをかわして行けり地域猫トラちゃん今日は満腹である

大山 園枝

日薬を毎日飲んでいられるけれど過ぎゆく時間にさ迷う旅路

堤 よしえ

父母と娘三人下見する永代供養墓いたく明るし

大山 園枝

風にのり花舞う水辺に地図を見る思いの儘にさ迷う旅路

寺井 恵子

歯ブラシをくわえて向かう夜の窓に五十半ばの面ざし浮かぶ

大山 園枝

ホームには突如ツツジが咲き乱れ赤い帽子の園児ら並ぶ

中澤 建

まどいつつ流れにまかす花筏 運や不運を言わざりし母

岡本 和子

がんばれど報われぬ世と祝辞言ふ岩肌に打つピッケルのごとく

中空 善彦

新刊を開きて栞ひものばすカフェリンデには森の静寂

田島 千代

話したきことが喉からあふれくる君みなければなほなほのこと

中村 孝子

日に三度用をつくりてわが部屋に顔見せくる娘のをれば

小野 澄子

花粉戦ゴーグル・マスクで武装中散歩の犬にガンとばされる

中安百合子

ひっそりと青葉の蔭に建つ歌碑の眼下に布をさらす多摩川
輸送中の鮭の鮮度を保たむと箱にウナギが混ぜられてゆく

長山 弘
西野美智代

「同じ物売らないでくれ」真向いのよろず屋来たたりし母の駄菓子屋
抜けまいと器具と戦う永久菌虫菌で欠けた弱る力で
綿菓子のごとく湧き出し白雲は石垣島の海に流れ込む
爆音の響く機内に見上げた冬の月牙ゆ我は旅立つ

仁戸 共代
丹羽 敏彦
野田 保
林 緑
平林かをり

「ありがたう」「苦勞さん」と言ふ母に「私は誰？」問へば「？」な顔をする
魚釣る案山子もいたり川の辺に人影少なき里を賑はし
この他に読み方あるのか新聞の記事にルビ有り「天照大神」

藤原 千賀
北條 忠政
細谷 悌子
甫守 恒子

早朝の静まりかえるヘリポート雉子のひと声姿はみえず
深緑の並木の下で園児らの赤い帽子がまりのことははずむ
大切なものが気づかずに 還暦は三〇〇日でやってくる
約束にもう間に合はぬ電車のなか広告画面に女ほほえむ

増田美恵子
丸島 和子
水澤 眞澄
水吉きよ子

明け放つ風呂よりひびく安曇節母の元氣をもらひ帰るぬ
エビ天のしつぽをネコにお裾分け家族集結今日はハレの日
改元の日は平穩に時すぎて小枝を濡らす雨音しずか
一年間空きし十年ダイアリー四月六日に「晴れ」と記せり

美濃又清志
宮崎 洋子
武藤 昭彦
毛利いぶき

降りつづく雨に色濃き雑草が歩道の舗石凸凹にする
晴れわたる風にしづきの吹き散りて新しき人歓声をあぐ
ひと口の菓子を細かに老母食み時ゆるやかに巡る暖流
一年経ち脱皮するらしゆつくりと童はランドセルの黄カバーはづす

森田 文康
門間 徹子
山口 妙子
山中 蕾

遊星をななつやつつと眠らせておひさまやと大きなあくび
黒くろとジャカラランダの樹に巣をつくり雉子鳩のひな二羽巣立ちたり

吉田 幸男

満開のさくらさくららの国立は人、人、人の笑顔あふるる
……………題詠……………

吉野美智子

狭山湖の野山を走り花の駅おとき電車は小さきわれ乗せ
真夜中をすれ違い様三毛猫が《スカイツリー》と呟く菜の花畑だ
野生動物とふれあう機会ない人ら奈良公園に鹿とたわむれる
機窓下の富士の裾野に点在の五湖それぞれの富士も見しかな
春ざりてペンペン草の群れて立つシャラシャラ音の聞こえてきそう

荒井 幸子
森村 明
五十嵐博代
板坂 壽一
市毛 信子

お鷹の道に売られている野菜手にとれば湧水のしづく光りて垂るる
あきる野市小川の住所そのままの庭にながむる秋川の四季
ここからは熊の野原と噂でもさらに進みし友達ありき
距離感のとかく難かしこのごろに良き間あひなり野あざみの花
娘ら二人学生野球にのめり込むわれのDNAだと友ら言う

内山 郁子
出村 俊子
榎戸 源茂
太田 公子
岡田 仁美

借金を踏み倒ししが故でなく野口英世が札から消える
「マンモスの丸焼きお庭で食べたい」と野望きらきら花ちゃん二歳
空白ののちに目覚めて見る秋の武蔵野日赤六階の空
摘み草の束や冠妹に飽くることなく児は野に遊ぶ

小澤 京子
田島 千代
田島 千代
北島 孝子

原っぱの桜の古木黒々ときさらぎの雨沁み込ませおり
岩手山の白雲流れ春の野に羊が草食む 五十一頭
知らぬ間に南天の実のなくなりて鴨一羽庭におり立つ
落人となりて「平野」と名を変えた千年前の由縁語る祖父

久野 静代
栗原 良子
古閑 麗子
近藤精一杯

野に立てば桜花びら散りこぼれこの春も君に逢えぬまま行く
野の原に寝ころび眺む あを空にすんずん圧しくる雲の迫力
まっすぐに飛び来る鳥の鈍く落つ ガラスに映る野山を信じ

澤田加津子
志田 彰子
四野宮和之

野の文字に東・西・南・北それぞれをのせた名字の芸人おもふ

朝五時に起きたるわれは鳥いまだ鳴かぬ花野に夫と入りゆく

柴田 慶子

武蔵野の公園入口に建つ小さな家夢二恋しと歌詠み雪坊

鈴木 正作

百色のえのぐ用いて描いた如四月の野山われを虜に

田倉 栄

日野のぞむ高幡城址に歳三は来たるやあぢさみ青く咲く朝

武野 敦子

「高射砲陣地跡」なる公園に草はびこりて遊具かしげり

中道 操

子供らは広場のすみにクラブおきスマホで野球三振をする

新美喜代男

迷い来しフランス人の案内して熊野の古道を弟と昇る

林 緑

環七が削ったわが家と裏の原とんぼを追った日々をいとおしむ

半田たつ子

放牧の乳牛たちは木の陰に根室別海町も真夏日今日は

平林かをり

いにしへの原野からなる土佐の杉一刀彫りに「ふくろう」となる

福島野々花

今は亡き名優たちにまた会える今宵の名画は「荒野の七人」

細越 幸子

手拭いを麦藁帽に巻きつけて煙草の葉を欠く父の脂の手

町田 サチ

この繁華街が風すさぶ野でありしころ独歩はたどりぬ雑木林を

松平 信久

春来れば迷わず買いぬ野らぼう菜この地に嫁して半世紀過ぐ

松本みよ子

スニーカージーンズリュック身につけてはあちゃんが行く野麦街道

水澤 眞澄

まだ君と名字に呼び合う仲なれど野茨かおるブランコゆらし

水澤 眞澄

花冷えの上野の森に西郷は裾のみじかき浴衣着て立つ

武藤 昭彦

ウイソコンシンの荒野に咲ける野の花を摘みて飾れば部屋は華やく

持田三重子

草叢にボール飛び込み神隠し暮れゆく野辺を少年ら去る

森田 文康

古里は主なくとも古里だ春を忘れず花は野に咲く

山本 安紀

やはらかき光あつむるふるとの野生のバラに蜂のさわがし

横山 節子

ウイグルの春は羊の二十万高速道路を悠々とゆく

吉田 幸男

野にありて自由に土をいぢる時美智子明るき少女に戻る

浦井ひろみ

神奈川県

梅の実の緑まほしき深大寺 令和の風を君とたたずむ

池上美津子

口紅の付けるスタバの紙コップ女医の机上に屹然とあり

印出美由紀

ヨガポーズ女性講師に誉められて一寸嬉しい八十路の春

碓井 功

右払いコツを覚えてカンクんの「人」の字半紙はみ出している

大曾根藤子

ほそ目して君に抱かるその時も青葉の笛を聞いていたりき

小川 司郎

つぶしたいいちこの赤さが残りし指先で文庫の頁をそつとめくるか

河野 真理

夜晩く帰る男を香が包む定家葛の垣根の路は

小平 貞

押花の匂ひが今も残るがごと記憶を紡ぐ黄ばみし手紙

近藤 泰夫

つながっているということ 魂の還る山、魂を拾う島

迪方 温峇

空襲で焼かれゆく町に息をのむ九歳のころの消えない記憶

風伸そい子

嫌光性種子かもしれない眩しさに顔をしかめる子には木陰を

高松紗都子

植木やに踏の葉もらい暮蛙大家のわたしをきよろりと見てる

武市 治子

蟬時雨いつしか今宵虫時雨あすは高齢者認知検査

田保美代子

「郷原」とふ吾妻線の無人駅かそかに鳴けるひぐらしのこゑ

富沢 昌晴

まつすぐな幹照らされて冬近き落葉松林こゝんと明るし

外山 和美

菜畑に日本みつばち蜜集む去年分家せし家族なるらし

永 桂忠

三日月の端の星仰ぎ今日の日の介護を終えて母と別れる

鳴瀬 弘美

夏休みに泊れる孫は吾と妻のあはひを動くまんじともゑと

原 新平

急登の岩をつかみてぐいと引く頭を出せば野あざみ揺れる

広井三枝子

バス旅にどこかで見たと思う人 二十五年前マカオの旅で

大和 嘉章

春雨は梅の梢に銀色の雫増しつづ降り続くなり

横山美智子

議事を終え旨酒酌めば蘇える辛口の言多き総会

渡辺 勲

綿貫 昭三

.....題詠.....

武蔵野は野菊野兎野の入日野を馳け抜けし野武士将門

池田 佳子

ぬかるみに踏み入り足をとられてもそれでも楽しい春の摘み草

石戸谷行子

夏野菜流れに浸し客を待つ深山の宿に夕の灯ともる

市原 昌子

かの時に一目ぼれしたクリムトとの再会を待つ上野の森で

岩船 展子

をみな子のスケボゆるゆる過りゆく人待つわれの視野のうらがは

印出美由紀

全神経まなこに集め光追う視野検査終え肩はロボット

大曾根藤子

村人は鞍馬天狗の出現に拍手喝采野外の映画

岡 彬

やさぐれた野菜碎けばスムーズに曙光通さぬ最果ての沼

岡村 還

被弾せる太股で野を彷徨ふたと満州帰りの父の語りき

小野 均

独歩の「武蔵野」なつかし手にとりてページをめくる初冬ふゆの図書室で

風伸そい子

つくし摘み野草料理と言ひながら玉子とじ出す叔母はもう居ず

高山 克子

雨繁く山越えあきらめ野宿した小諸の駅の朝忘れぬ

横山美智子

はじめての田植え稲刈り麦踏みと野良着の似合う十八のわれ

渡辺 和子

新潟県

こひしさに耐へつつ見しや兵士らは南の島にかぶ星座を

荒井由紀子

曾孫の入学式まで生きたいと願ひるし父よ今日がその日ぞ

酒巻 幸子

「からずさんことりさんたようなら」むすめのことばおもいだす空

七里 松枝

東京の孫へ作りし裨天を今アメリカで曾孫が着てる

堀口 寿仙

.....題詠.....

白鳥の群を送りて田植終う新潟平野に音もなく雨

近藤 栄子

富山県

何よりも針魚の刺身好きで息子を迎える飼猫ニーナ

岡田 澄江

来てくれて訪ねて行きて年に二度会えばうれし孫はみちのく

中沖 正之

できるとふ暗示をかけて褒めまくりやる気引きだすわれは詐欺師か
.....題詠.....
山中美智子

ふるさとは碁石村なり名は消えぬ遊びし山野学舎もなし

山本 光幸

野にわたる若草の風薫りくる卯月の空の花の薄雲

吉井 敬三

石川県

豚コレラ四万頭の悲鳴聞く処分の学生にメンタルケアを

飯田 世三

久々に分業の一ツ担う今朝前掛きりり背筋が伸びる

伊藤 弘美

鱧五匹今日のリハビリ及第と釣り糸を巻く術後の夫は

越田 峰子

二週間飽かず「かあちゃん」と話しかけ嫁ぎし国へ娘の今朝は去ぬ

架谷 俊子

.....題詠.....

Yシャツを野良着に下ろし畑に出で縄張り畝に新ジャガ植うる

飯田 世三

加賀の野は青く色取り植え終えて仰ぐ白山残雪少なし

中村 富代

産土の緑野を均すソーラーの工事を雉きんぎょどこかで見てる

室木 正武

福井県

わが里の来し方すべて知りぬしか社の狛犬苔むすままに

落合美予子

初生りのキュウリ甘くて美味しいかむしんにカラスついばみており

仕入 忍

「四さい」と指出す男児にゆずらるる車窓の麦秋どこまでつづく

山岸小夜子

サクサクと秒針運ぶ腕時計夫逝きしこと伝えるすべなし

山村 輝子

.....題詠.....

お前が先に死んだら俺わもすぐに逝くといふは唐突のいばらの花

田所 芳子

独活野露手作りこんにやく木の芽みそ筍そえて夕餉となせり

永田きみ子

汽車の窓に手を張り靄る庄内平野むねに畳みて旅立ちし朝

永田 弘子

山梨県

満開の芍薬わらう雨上がりフフオホホと花散ることに

加賀美 公

木漏れ陽を透してのぞく春の空牛乳混ぜた青空優し

小林 静江

おんぶする如くザツクに葱の束女子中学生自転車漕ぐ

角田 好弘

犬好きはわかるのかしらすり寄ってなめてあまえる差し出した手を

渡辺さちえ

..... 題詠

野良猫とアイコンタクトとる夕べたがい気づかう熱中症を

加賀美 公

野仏にコスモス一むら点景の無人の駅に一人降り立つ

宮坂 延雄

長野県

梅雨空の様子を見ての梅出荷昼もそこそこ梅をもぐなり

市川 光男

若き僧の遺影の袈裟の赤色と面艶やかに祭壇せつなし

唐澤やす子

木曾駒ヶ岳を黄砂はるばる越えて来て桜の花もおぼろに見ゆる

木下 慧子

染みるやうな新緑の山を潜り抜け天竜川見えてまたもトンネル

後沢 恒子

耳遠きわれが歌へば「舟歌」のさはりどうやら半音下がる

佐々木桂子

バス停に毎朝会う顔名は知らぬみんな揃うとなぜか安心

柴田 康代

短歌詠む素材ポロポロこぼす夫妻は拾って傑作を生む

柴田 康代

結婚は空中ブランコ両の手をつかまれば網に落ちた自ら

宮澤 恵子

..... 題詠

口遊ぶ麦と兵隊に見えてくる北支の父の戦野の行軍

後沢 恒子

夕暮を葦ついついと彼岸花 君に会ひたし野阜巡る

佐々木桂子

兄弟の自転車つらなり帰り来ぬ小さきカゴに小さき野の花

田中 純子

野猿らが南瓜抱えて持ち去ると媪が嘆く谷間の畑

傳田 房子

岐阜県

祭り前常より混みし理髪店起し太鼓カットの古川やんちゃ

江尻 恵子

きつぱりと剪定されし夕庭に半透明な蜘蛛の糸張る

子安 浪子

膳写板・回転計算機・蓄音器・青春深くうづもる令和

櫻井 房江

彼の日目のスクラム、ジグザグ語りかけ青春還る白髪(婚活)

松尾 東一

長火鉢小さき傷の黦みて定席にありし父の面影

横山 清子

五月二日子の持ちくれしお供えの草饅頭食む義母の命日

横山美保子

..... 題詠

走ったり寝転んだりの幼子の体から立つ野原の匂

江尻 恵子

悲しみのころ包まん柔らかき若葉のようなレタスのサラダ

子安 浪子

影一つ子供小さく風ふかれ満州の児よ今どこにいる

竹田 義秋

あの頃は襦袢を被りひたすらに野口英世の伝記読みにし

松尾 東一

野うさぎのわが前に出て駆けゆるるスピードやよし峠をくだる

三田村広隆

静岡県

新聞を丸めた球をそつと投ぐバット振る児のやはき足裏よ

飯田倭文子

わがせしがごとうるはしみする女とかの行きつけの鰻食むらむ

河田 琴栄

もも色に変色したる骨拾う癌に苦しみ逝きし子の骨

後藤 瑞義

花を観る花に見らるるいけばな展和服の衿元指にて寄する

清水美千代

風船のヘリウムガスを吸い込んでマイクの先の詐欺師になった

高田 圭

杖握る手に瘤できて八十半ば歳の重みを杖で支える

野村 脩二

もやもやを胸に秘めるか少年はサッカーボール蹴飛ばし上げる

宮城 礼子

百回のキスを盛り込めと言ってやろう君が始める終活ノート

山田 文好

..... 題詠

風やみてふと立止まる自転車に野蒜の花の不意にあたらし

大庭 拓郎

ゆらゆらとひと目めぐりて野に遊び茶の間にふわり透明となる

大庭 拓郎

時ならぬ四月の雪は裾野まで純白の富士神在ますごと

町田由美子

父逝きて農継ぐ者なく半世紀荒野とならむ古里の畑

友井七実子

愛知県

霧雨は桐の大樹の紫をけぶれるごとくしづかに濡らす

阿部 啓子

あのときをなかつたことにはできなくて庭の山茶花はらはらと散る

伊藤 貴久代

広がりし花野に立てば風渡るあの若き日に誘うように

伊藤 絃美

老死せし愛犬は胸に生きつづけわれが逝くときもう一度死す

大成 金吾

少年の納豆巻をもりもりと食みいる桜若葉の眩し

小川 清紅

令和なる新元号を海底に眠れる魚となりてそを聞く

笠井 忠政

脈拍が整ってくる目を閉じてベーターベン¹の運命聴けば

笠井 忠政

さながらに広目天の貌なして夫は杭打ち茄子の木を支う^か

梶村 京子

被写体となるを意識し夫立てり武田信玄銅像前に

金子 芳江

軽やかにイントロ流れ背を申し息ととのへてスポットの中

河合 佳代

親切に触れたその日は車椅子自走の腕も軽く感じる

清水 将一

玄関に降りた鳥と目が遇いぬ唯一の客10連休の

添島貴美代

卑屈さを肥やしに変えよわたくしは桜の陰に咲く木瓜の花

高橋みどり

てくてくと歩く人みててくてくと歩けない人さくら舞ひ散る

田中八重子

蜘蛛の糸飛び来てヒタリ顔に付く気味わろしこの田舎細道

中村佐世子

燃えさかる大聖堂に目をとちて唯ひたすらに賛美歌うたふ

羽生由紀子

水張田にアルプス映る信州で見たことなき笑顔の夫

細川 延子

この痛さ零から十で表さむ五と口にすも六かもしれぬ

松井 孝憲

香くゆる朱の階段に白足袋の跡のかすかに茶屋街の楼

真野 勝子

カレンダー嫁ぎし日のまま掛けられて埃うつすら二十年を経つ^{はたとせ}

宮岡弥栄子

じいちゃん、杉菜と土筆は親子なの兄弟なのと不意に兎は言う

八木ゆり子

………題詠………
うず高く除染の土の野積み曝る汚れちまった悲しみ重く

伊藤 忠男

いつか見た花野は今日は霧の中遠き思い出包みて見せず

伊藤 絃美

ふるさとの緑濃き野に芹を摘む亡き母がいる まどろみの中

井戸田雅子

継ぐ子なき山の畑は野に還るみかん畑はくすの葉の海

笠井 忠政

中国語と英語がともに旅してゐる観光バスは花の武蔵野

笠井 忠政

むかしは田いまは野原のここに棲む夏虫たちの二世三世

梶村 京子

放牧の草食む馬の眼のやさし野をゆつくりと包む夕焼け

加納 金子

ヒットされ白球内野をすり抜けて逃げる仔犬のごと駆けてゆく

島田久美子

野辺おくり昔の慣習知らぬまま観光客行く六道の辻

清水 将一

「まだここで進化している友」を抱き野口五郎がローラを歌う

高橋みどり

農具など整理と夫は認めて十月二日それより白紙

田中八重子

大宮人狩りに興じける野は名のみ野球でふ和語思へば深し

中井 貞子

グラウンドの野球小僧の声聞こゆ風に乗りきてちぎれちぎれに

中村佐世子

終末時計のこり二分と文字おどる野に撫子のたねを蒔くなり

原 佳子

からめ合い相撲取りしたオオバコの穂が靴を打つ草野を歩む

三好 ゆふ

三重県

やはらかき大根の双葉間引く背に五月の夏日容赦なく照る

秋田 彦子

犬の名を小声に呼べば前を行く紳士答える犬より先に

伊藤 石英

故郷の空き家の庭に虎刈の刈り込み残り帰京の息子

岡 公一

ハモニカの音色清しき横丁のほつほつ点る提灯あかり

奥山 功

風ぬるくむづかりをらむ花の芽の季の段差に老いのつまずく

長谷川艶子

………題詠………

大空に羽根のかたちの雲浮かび野はたんぼの祭の飛びたつ

秋田 彦子

野遊びのシート守りて缶ビール跳ねる妻子を時折眺め
記紀本に書かれしタケル終焉の能裏野なる地に我住みており

伊藤 石英
内田 雄亮

人生はパズルの様と思わるる喜怒哀楽をはめ込みながら

和歌山県

堀内 房子

少子化と言はれて久しき街中に学習塾のビル立ち並ぶ

上野 壽子

先生と自転車稽古すシюнちゃん「学校も友達も嫌になつてん」

北村 薫

数独を解く傍^{そば}に来て難病の夫はひたすら眠りてゐたり

柴田 厚美

ほろ酔いという飲み方をしてみたいその瞬間に誰か止めてよ

中尾 加代

..... 題詠

震災を嘆ける嬸が鋏の柄をしかとうち締めまた野良に出る

赤松 伴子

「プロとして野球を愛しぬいた」と言いイチロー選手弥生に去りぬ

上野 壽子

野を駆ける義足の友に懸命に生き抜くべしと教えられたり

立川 寛智

ぎりぎりに来ると最前列になる君は野心家計算ずくさ

中尾 加代

鳥取県

ドクターヘリの轟音に飛び出せりゆふぐれの先 沖縄がある

入沢 由子

..... 題詠

勲章のごとくひつつき虫を付け野の仕事より夫婦りきぬ

荒井 玲子

クツひもを結び直すと野に座りカラスノエンドウ弾けるを聞く

里見 明子

修善寺の狩野の流れ名物はいつの御代にも鮎の甘露煮

柳谷 保

島根県

冬ぬくく子らの知らざる霜柱やがては死語となりて消へむや

熊谷多賀子

乗り込めばエレベーターをおさな児の鯖缶の香が立ちのぼる朝

田中 勝美

公園の冷たき風のみち外れて土筆はえたりみなみどり色

田中 勝美

咲き初めて胸次の獅子がゆつくりとその身起こしてゆくぞ桜よ

田中 勝美

..... 題詠

ひと色に冬枯れさむく荒れし野にただありがたき日の光かな

熊谷多賀子

岡山県

子に運転止められし夫の歩に合わす川沿いの道の猛けき夏草

大武千鶴子

二日だけ令和を生きて友逝きぬ桐の花舞ふ静かなる午後

大巖 允子

逝きし子の末期の写真また開く父親の面にそのままなるを

大森志津江

破る子もなくて障子は年老いて夜ごと表面^{おもて}に小さき星たち

岡田 耕平

ただ生きているだけだったただ家にいるだけだった十連休は

小橋 辰矢

朴の葉の落葉敷き詰め植えし畑アスパラ五本が朝の陽に輝る

小林 洋子

寝る前の初の葉を今迄も有ったではないかさあ楽に呼吸を

沢岡 晃子

「絹掛の滝」と名付けし古の煌めく才知その滝にみる

杉 秀樹

フイリリりと草ひばり鳴くああ今朝も些細なことで遣り合ひたりしよ

高原 晴子

花むぐり花粉にまみれ忙しなくなにわいばらの花ざかりの日

藤井 繁子

口籠もり額から汗通夜の客窓に張り付くヤモリ見つめて

藤原由紀子

..... 題詠

境内に漏れくる法話の切れ端を野鳥の声も混ぜて聴きをり

岩藤由美子

「野口英世」きそふて読みし妹の忌は近づきぬ水無月十日

大巖 允子

与党には期待できない野党にも期待できなひとりあえず寝る

小橋 辰矢

道案内すること野鳥が枝渡る荒神宮へのお参りの道

小林 洋子

生きぬけば峠を越えて生きぬけば野火の匂ひす現し世の淵

逸見 素行

教会を出しバルドンの行列に旅の吾交り野へと下りぬ

森 富美子

広島県

朝イチで窓辺の椅子に腰おろす血圧計と向きあうくらし

栗田 孝子

はい却下いいえ却下と言はれては断捨離される夫の抽斗

向井 好美

..... 題詠

野仕事の合間に食べんと畦道に置きし御八つを銜え鳥飛ぶ

峠 美恵子

すかんぼは野にありて野がよく似合ふ埃にまみれ雨に洗はれ

山口県

我が齢数ふる時は亡き母の齢も数ふ早や九十五か

力芝根ごと引き抜くその下に緑ののぞく一ミリほどが

川原に県人会の旗並び昭和の花見は晴れて眩しき

六十年使いし臓腑洗いあげ椿の根っこにケラと眠らん

鼻孔より内視鏡徐々に下りゆく胃も十二指腸もピンクに映えて

蛙より蛇へと移る生命の授受の瞬間息止めて見つ

又吉に「花火」をみたと言う媼「火花」と又吉小声に言えり

コード引き昭和に買った掃除機が部屋へ付き来るペットのように

すみません床屋で寝るのが好きなのでしゃべりませんがよろしいですか

遠き日に村のお堂でキューピーさん踊りし記憶は三歳児なり

……………題詠……………

朝の陽にいかにも仕事するさまに野良着着込みて畑に下り立つ

若き母がご殿が建つと見しと言う家の野地板腐り屋根おつ

豆飯は嫌いとお若くもない男白飯くれと野暮天を言う

静寂の闇に光った峠坂照らして通るトラック野郎

徳島県

吊したる喪服また着る十二月白より黒のネクタイ多し

一日は見合ひ二日に結ばれて令和六日目孵化した金魚

愛媛県

曇天の瀬戸内暗く海賊の島の桜にわれら集えり

天井に飛び交うWiFi二人してスマホを握る地球の隅に

向井 好美

木嶋 政治

近藤 順子

清木 幸

瀬戸内 光

弘兼 安雄

藤井 重行

松浦美智子

松浦美智子

松本 進

山下 咲子

近藤 順子

清木 幸

中村 蓉子

松浦美智子

小畑 定弘

塚原味紀枝

檜垣由美子

眞部 孝司

人間の胎児のような体勢で息絶えている罨の子ねずみ

枕頭に置きし牡丹に麻酔より醒めたる父の眼が笑ふ

……………題詠……………

夕暮れを野中に遊びし子の帰り母の膝へと顔をうずめる

いつの日か原野とならむこの里に高々と泳ぐ緋の鯉鱈

亡父のごとくスコップ使ひ野蒜掘る新緑匂うかぎろひのなか

高知県

……………題詠……………

如月の牧野富太郎ふるさと館小鉢に白きバイカオウレン

ドアを閉ぢひかりあふるる野に向きてアクセルをふむ昼の国道

福岡県

人体の血管の長さは十万里。嘘と思ひぬ、嘘じゃなかった

メタボなる大サボテンの体たらくホース巻かれて養生室に

物忘れ診察の医師「普通です」八十五歳ただ前向きに

アラスカに旅した孫のお土産は赤き靴下部屋に飾りぬ

旅中こしもで甑倒しに出交せば振る舞い酒の喉にしみいる

……………題詠……………

黄の莖撮らむと腹ばう阿蘇の野の黒き土の面温もありぬ

ひさかたの光さす野につんつんと背伸びしたてのあまたの土筆

寝たきりの老びとを野に連れ出して青天井を見せてやりたき

春の野辺駆けつこしては寝ころがり姉を押し合ふ弟妹ふたり

夏の野の青草盛り照り付ける日差しの中に陽炎揺らぐ

墓に手を置くは会うこと語ること吉野秀雄のような天穹

復興の養蜂箱の巢門から炎群ほむらと化して野へ向かう翅

三浦 将崇

三島誠以知

檜垣由美子

三島誠以知

渡部 節子

水田 エミ

依光ゆかり

石井 大幸

泉谷 陽子

篠島多美枝

友岡ヤスヨ

藤原ミツ子

市川登美榮

川畑万寿代

瀬戸口真澄

藤村 義治

藤原ミツ子

松本千恵乃

松本千恵乃

松本千恵乃

松本千恵乃

あまおうの食みては野いちご想いだす昭和時代のぜいたくはてき
亡き母の野良着を今年も虫干しす久留米緋の藍色清し

牟田 倫弘
若林 幸子

佐賀県

荷を運ぶトラック着きて新築の四角の部屋に曲線うまれる

真子美佐子

……………題詠……………

僧行基の持ち帰りたる中国茶嬉野茶となり日本の銘茶

木室 榮子

長崎県

立ちのぼるみそ汁の湯気お茶の湯気温泉の湯気湯気は温もり
その顔の見えざる程に口あけて親の餌を乞ふ燕の雛は

近藤久美子

リウマチを神の試練と人は言う私の神は意地悪じゃない

佐々木祥一

大屋根にガッチリおさまり五十年母校のおゆすり我が家の瓦

田中 光子

巡回のナースが夜中をのぞきをわが狸寝を知るや知らずや

長谷智香江

……………題詠……………

武蔵野の林道にほのか匂ひあり見上ぐれば柿の白き花筒

山下久美子

熊本県

夕風に楠の枯れ葉がカラカラと掃くあと先に降ることく落つ

近藤久美子

……………題詠……………

野いちごを採りし秘密の山道は崩落防止の網張られたり

沖田須磨子

大分県

黄金の鍵投げ入れて湖開き春の琵琶湖の水面輝く

野崎 礼子

カクテルのブルーハワイを飲むやうに五月の空を鯉が飲み込む

荒谷 みほ

ヤンキーズ対アストロズ戦の画面上戦闘機墜落の字幕入りくる

菊地 孝也

六十の歩みをせよと足にいう歩幅狭まる八十路の足に

中島 絃子

春一番荒べる昼を人気なき校舎の窓にカーテン躍る

中島 絃子
羽田野とみ

……………題詠……………

開墾の昭和を桑を植えし野は平成をソーラーパネルが並ぶ

佐藤 政俊

運動会のライン残れる校庭に少年野球の高ご多飛ぶ

羽田野とみ

際どきはビデオ判定あるらしくあ野球は遠く遙けし

丸山香代子

宮崎県

早苗田に映るリニアの実験線長々高架は侘しく残り

海野奈美子

畑の草抜く人われの外になした腰下ろし半日過ぎぬ

北林 嘉晃

いつの世に植えられしかは知らねども老桜散りて平成終る

児玉 憲幸

……………題詠……………

参観日を楽しみとしていた母よ野良着を着物姿に変へて

福留佐久子

鹿児島県 「元気でな」ただそれだけを父は言ういつもより静か明日巣立つ子に

萬福 平次

沖縄県

鶯の声をのせくる風に触れ日増しに伸びゆくゴーヤーの蔓

宮城 鶴子

ぼくにとつて(武蔵境)は触れられたくない町じゃなく終の住み処だ

山城 孝子

……………題詠……………

野良猫のような姿でこの町に来た。ただそれだけ。だから大好き

山城 孝子

NHK学園生涯学習フェスティバル

武蔵野市短歌大会

入選作品集

令和元年八月二日発行

編集
発行 N H K 学 園

〒一八六一八〇〇一

東京都国立市富士見台二二三六―二

電話〇四一五七二二三二五二代

印刷 明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたしません。

©2019 NHK学園

ホームページ <http://www.n-gaku.jp/life>

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか

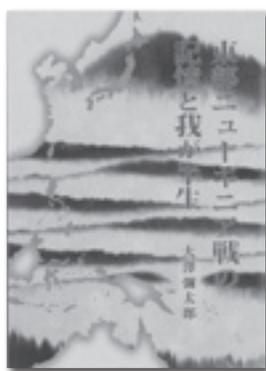
日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK 学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習レポートがそのまま原稿になります。

NHK 学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15金	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15金	名古屋	キャッスルプラザ
4/5金	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19金	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23木	高松	高松シティホテル
5/24金	高知	高知サンライズホテル
6/20木	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21金	宮崎	エアラインホテル
7/26金	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22木	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23金	青森	ホテルJALシティ青森
9/13金	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27金	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25金	金沢	ホテル金沢
11/14木	京都	メルパルク京都
11/15金	和歌山	シティイン和歌山
12/13金	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

※相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接お問い合わせください。

下記の時間枠を設定、先着順です。お早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制です。ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃ってなくても大丈夫！まずはご相談ください。出版アドバイザーがいてないにご説明します。

お問合せ NHK 学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

NHK学園 武蔵野市短歌大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「武蔵野市短歌大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,800円

- * A4判(297×80ミリ)でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

▼入選証

入選証を切り離して短冊掛けに入れた見本です。

①短冊掛け(青)

★作品は2行になります。ご指定のない場合は自動的に18字で折り返しますので、ご了承ください。

《専用額》

①短冊掛け(青)

材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,700円(税・送料込)

②額(クラシックゴールド)

上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,700円(税・送料込)



《トロフィー》

作品をトロフィーにお彫りいたします。

1つ 14,000円(税・送料込)

* 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。

キ.....リ.....ト.....リ.....

令和元年度 NHK学園 武蔵野市短歌大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 _____

お名前 _____

電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品(全文を記入してください)	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①普通為替または定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先
〒186-8001（住所記入不要）

NHK学園教材サービス
武蔵野市短歌大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

口座記号番号											
0	0	1	9	0	7	5	6	3	6	0	8
加入者名		NHK学園 教材サービス									

※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。

※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。

※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。

※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

※ コピー可

為替専用

令和元年度

NHK学園武蔵野市短歌大会

入選証および専用額申込書

名前	フリガナ	受講者番号										
住所	〒											
電話番号	-	-										

○入選証

掲載誌 ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価(1枚)	枚数	金額
				1,800円		
				1,800円		
				1,800円		

◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。

◆同じ歌を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。

○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,700円×	枚	金額	
額・クラシックゴールド	数量	2,700円×	枚	金額	

合計金額 _____ 円 を為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

第二十二回

NHK全国短歌大会

NHKとNHK学園が主催する短歌大会です。おかげさまで、今年で二十一回目を迎えることになりました。今年度の題詠は「大」です。歌壇を代表する歌人が選にあたり、大会当日はNHKホールに集います。みなさまからのご投稿と会場へのご参加を心からお待ちしております。

題詠 「大」

投稿締切 令和元年9月30日(月)

開催日時 令和2年1月25日(土)

午後1時～午後4時

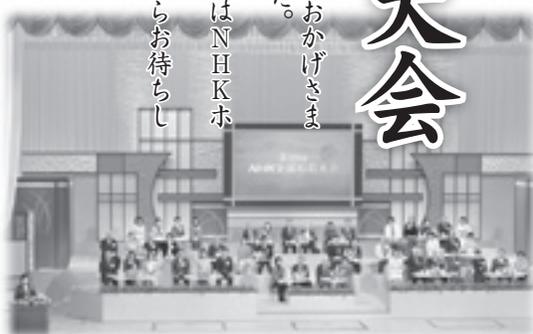
会場 NHKホール(東京・渋谷)

主催 NHK・NHK学園

後援 文化庁・東京都・現代歌人協会・日本歌人クラブ

協力 NHKエデュケーショナル・NHK出版

※大会当日の様子は録画し、編集の上その一部を後日放送する予定です。



選者

自由題・題詠

伊藤 一彦	坂井 修一
江戸 雪	佐佐木頼綱
大島 史洋	俵 万智
大辻 隆弘	永田 和宏
小池 光	穂村 弘
小島ゆかり	近藤芳美賞
三枝 昂之	岡井 隆
斉藤 斎藤	栗木 京子
佐伯 裕子	篠 弘

(五十音順)

第二十二回 NHK全国短歌大会

新作十五首募集

近藤芳美賞



生誕一〇〇年を記念して創設された「近藤芳美賞」は、今回で七回目となります。

近藤芳美氏は美しい相聞歌から歴史と対峙した批評精神にあふれた幅広い多くの作品を残し、半世紀にわたり歌壇に寄与されました。

昨年は年齢層やテーマも幅広く、三九〇組を超える優れた作品が寄せられました。今年も多くの短歌愛好家の皆さまのご応募をお待ちしております。

お問い合わせ先・投稿用紙請求先

NHJ全国短歌大会事務局 〒一八六一八〇〇一

東京都国立市富士見台二一三十六一―

代表電話 ○四二一五七二―三二五―

(平日9時30分～12時・13時～17時30分)

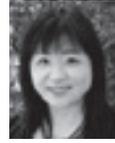
第21回 NHK 全国短歌大会選者

一首とともにご紹介いたします。(敬称略・五十音順)

自由題・題詠の部



伊藤 一彦 (いとう かずひこ)
昭和十八年宮崎県生れ
「心の花」選者
行きしことなき絶嶺の月光が
夜の睡りのなかに射し来る



江戸 雪 (えど ゆき)
昭和四十一年大阪府生れ
「塔」選者
うらざりと云つてしまえば光りだす
蜻蛉群飛の夕暮れの水



大島 史洋 (おしま しやう)
昭和十九年岐阜県生れ
「未来」編集委員・選者
タバコのみいよいよ冷遇されている
今日はホテルの植え込みの中



大辻 隆弘 (おおつじ たかひろ)
昭和三十五年三重県生れ
「未来」選者
つまりつらい旅の終りだ 西日さす
部屋にほのかに浮ぶ夕椅子



小島 ゆかり (こじま ゆかり)
昭和三十一年愛知県生れ
「コスモス」選者
おほき柿食べつのおもふ生涯に
つゆかかはらぬ哲学と株



三枝 昂之 (さえいぐさ たかゆき)
昭和十九年山梨県生れ
「りとむ」発行人
一輪が一輪を呼ぶ樹の力花の力に
丘は目覚める



斉藤 斎藤 (さいとう さいとう)
昭和四十七年東京都生れ
「短歌人」編集委員
縦に窓を全身で雑巾で拭くおばさんを
そうとわからずに見た



佐伯 裕子 (さえき ゆうこ)
昭和二十二年東京都生れ
「未来」選者
この星の面会時間に祖母に会い父に会い
母に会い別れし



佐佐木 頼綱 (ささき よりつな)
昭和五十四年東京都生れ
「心の花」編集委員
森の夜に星ひとつづつ灯すこと
義父が小路に突ける白杖



伊 万智 (い ちま)
昭和三十七年大阪府生れ
「心の花」同人
ほどほどの切れ味がいい
セラミックナイフのような新語をつかう



永田 和宏 (ながた かずひろ)
昭和二十二年滋賀県生れ
「塔」選者
一重山吹しづけ花を喜びし人と
ありしよ茫茫と昔



穂村 弘 (ほむら ひろし)
昭和三十七年北海道生れ
「かばん」同人
春のプール夏のプール秋のプール
冬のプールに星が降るなり



小池 光 (こいけ ひかる)
昭和二十二年宮城県生れ
「短歌人」編集委員
立つ位置を微塵も変へず立つてゐる
郵便ポストの兄おとうとは



坂井 修一 (さかい しゅういち)
昭和三十三年愛媛県生れ
「かりん」編集人
講堂前敷石でコンとつまづきぬ
学者はみだす茂吉とわれと

短歌学習の一環として
NHK全国短歌大会へ
のご投稿としてご観覧を
心よりお待ちしております

ジュニアの部



東 直子 (あおこ)
昭和三十八年広島県生れ
「かばん」同人
ふたりしてひかりのように泣きました
あのやわらかい草の上では



大松 達知 (おおまつ たつち)
昭和四十五年東京都生れ
「コスモス」選者・編集委員
「COCON」発行人
誤植あり。中野駅徒歩十二年。
それでいいかもしれないけれど

近藤芳美賞の部



岡井 隆 (おかい たかし)
昭和三年愛知県生れ
「未来」編集・発行人
暁闇の明るる頃ほひチエロンナタ
三番を聴く(生きよ)つて声だ



栗木 京子 (くりき きょうこ)
昭和二十九年愛知県生れ
「塔」選者
紅葉がアルファベットのやうに
散る道を歩みぬ黙してふたり



篠 弘 (しの ひろし)
昭和八年東京都生れ
「まひる野」代表
降伏をうなぐす伝單を拾ひける
斜りはいまも泥ぬかる道

投稿要領 — 自由題・題詠の部 —

◆左頁の所定の用紙(「B1」可)を使用してください。
投稿用紙はNHK学園のホームページからもプリントアウトできます。
ひとり何組でも、ごなたでも応募できます。

- 投稿作品は、未発表・自作で、作者本人からの投稿に限りです。
- 二重投稿(同一作品及び酷似作品を新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、コンクール、インターネット、結社誌、同人誌等へ投稿)は固くお断りします。
- 同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。

題詠「大」

必ず「大」の漢字を入れてください。作品の季節は問いません。題詠のみの応募はできません。

投稿料

①あるいは②の形式をお選びください。何組でも応募できます。

- ①自由題二首 — 二首一組 二、二〇〇円
- ②自由題二首と題詠「大」一首 — 三首一組 三、二〇〇円

*題詠のみの応募はできません。

送金方法

◆郵便為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購入)、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください(切手の代用は不可)。

郵便払込をご利用の場合※払込手数料はご本人様負担となります。

郵便払込取扱票の通信欄に組数と投稿料をご記入の上、払込みください。振替払込受付証明書を投稿用紙の「のりしろ」欄に貼り付けて、ご応募ください。

口座番号：00180121357944

加入者名：NHK学園 短歌大会事務局

海外在住者の応募について

海外在住者の投稿締切は9月30日(月)必着

◆海外在住の方の応募は一人一組までとし、自由題・題詠の部の投稿料は無料。

◆メールアドレスまたはFAX番号を明記してください。

◆海外投稿作品の入選結果は、NHK学園ホームページに掲載します。

◆作品集は別途お申込みください(一部一、五〇〇円)。

ジュニアの部

ジュニアの部の投稿締切は9月13日(金)消印有効

◆対象は幼児、小・中学生です。

◆専用の投稿用紙は、NHK学園のホームページからプリントアウトしてください。

投稿締切

令和元年9月30日(月) 消印有効

◆投稿後の作品の訂正や返却はできません。投稿作品の控えをお手元に残してください。

選考

選考結果に関する電話等でのお問い合わせはご遠慮ください。

◆予選選者による全作品の選考会を行い、これに通過した入選作品から選者が特選、秀作、佳作を選びます。

◆特選に選ばれた作品の中から、選考結果を考慮し、事務局で大会大賞を決定します。

◆入選・入賞作品はNHK、NHK学園、NHK出版で使用させていただくことがあります。

◆入選内定作品のみ作者に12月上旬に文書でお知らせします。

入選作品集

◆全投稿者に、投稿の組数に応じてお渡しいたします(投稿一組につき一部)。

◆投稿者で会場参加される方↓入場券と引きかえに、当日会場でお渡しします。

◆投稿者で会場参加されない方↓大会終了後に郵送します。

◆ご希望の方には、一部一、五〇〇円が頒布いたします。

(書店での取扱いはありませんので、事務局へお申込みください)

発表

◆入選・佳作・秀作・特選の全入選作品は、大会当日(令和2年1月25日)発行の「NHK全国短歌大会入選作品集」で発表します。

賞

◆選者特選・秀作・佳作

全選者が自由題特選2首、題詠1首、秀作25首、佳作を選びます。

◆選者特選1席に選ばれた作品(自由題・題詠各一首)は、NHKホールのステージで発表します(特選と秀作の方には賞状をお贈りします)。

◆大会大賞

大会大賞作品は、令和元年度文部科学大臣賞の候補作品となります。

※大会大賞には賞状とトロフィーをお贈りします。

大会入場申込方法

申込は、12月13日(金)必着。入場券は、1月上旬にお送りします。

◆入場は無料。ごなたでも参加できますが、入場券が必要です。入場券一枚につき、二名様までご参加いただけます。ご希望の方は次の方法でお申し込みください。

◆投稿する方

投稿用紙の「参加する」欄を必ず○印で囲んでください。

作品集引換を兼ねた入場券(八ガキ)を郵送します。投稿組数にかかわらず、入場券はお一人につき一枚の発行となります。

※○印がついていない場合は、「参加しない」とさせていただきます。

◆投稿しない方

往復八ガキに、「短歌大会の観覧希望」と明記し、返信宛名欄に郵便番号・住所・名前をご記入の上、左記の「NHK全国短歌大会」事務局宛にお申し込みください。



前回の入選作品集

〒186-8001

東京都国立市富士見台 2-36-2

NHK学園

NHK全国短歌大会事務局 御中

投稿在中

お問い合わせ先・投稿先

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2

NHK学園

「NHK全国短歌大会」事務局

☎ 042-572-3151 (代)

(平日午前9時30分～午後5時30分)

ご投稿には、
左の点線を
切り、宛先
として貼る
と便利です。

ここから切り離し郵送

第21回

——自由題・題詠の部——

NHK全国短歌大会投稿用紙

★投稿締切 令和元年9月30日(月) 消印有効

※印刷は任意でご記入ください。

名前	フリガナ _____ (男・女) (歳)
作品集に掲載するお名前	(フリガナ) _____ ※本名と違う場合のみご記入ください
住所	〒 _____
電話番号	_____
生年月日	明治・大正 昭和・平成 ____年 ____月 ____日

受付番号 (NHK学園記入)

受付番号 (NHK学園記入)

大会当日
会場に

どちらかを○で必ず囲んでください。
参加する 参加しない

府都
県道

作品集に
掲載する
お名前

(フリガナ)

のりしろ

投稿料を郵便払込された方は
振替払込受付証明書(お客さま用)
を貼ってください。

お手元がない場合は下記へ払込日をご記入ください。

●投稿料

自由題 1首の場合 11,100円
自由題 1首+題詠 1首の場合 11,100円
自由題 1首の場合 3,300円

●投稿料のお支払い方法

- 印をこぼしてください。
- 現金書留
- 定額小為替 ・ 普通為替
- 郵便払込 (月 日ご払込)

※入場券は投稿組数にかかわらず、投稿者1名につき
「1枚(名義入場可)の発行となります。
※印がついていない場合は「参加しない」としてご記入
ください。

自由題 1

自由題 2

題「大」

(希望者のみ)

「大」の漢字を必ず
入れてください。

※題詠のみの投稿は
できません。

自由題 1	自由題 2	題「大」
3首 3,200円	2首 2,200円	

近藤芳美賞

——新作十五首募集(テーマ自由)

戦後短歌の牽引者であった近藤芳美の功績を称え、より多くの方に短歌に親しんでいただくとともに優れた作品を顕彰するため「近藤芳美賞」は、第七回目の募集をいたします。前回は全国の幅広い年代の皆さまから三九〇組を超える優れた作品が寄せられました。

多くの短歌愛好家の皆さまのご投稿をお待ちしています。



プロフィール

近藤芳美 (こんどう よしみ)

1913年5月朝鮮の馬山浦(まさんぼ)生まれ。2006年6月93歳にて逝去。本名、芽美(よしみ)。「戦後短歌」を牽引した歌人。みずみずしい相聞の第一歌集『早春歌』から出発し、技術系の知識人として一貫して政治や社会に鋭い関心を寄せ、批評精神を保ち、生き方を問いつけた。『新しい短歌の規定』をはじめとする歌論も、歌壇に大きな影響を与えた。31年に『アララギ』に入会。中村憲吉、土屋文明に師事。47年『新歌人集団』を結成。48年に第一歌集『早春歌』、第二歌集『埃吹く街』を刊行。51年、『未来』創刊。日本歌人クラブの結成時のひとりであり、長らく現代歌人協会理事長をつとめた。歌集は他に『黒豹』『祈念に』『希求』『岐路』『岐路以後』など。迢空賞、詩歌文学館賞、現代短歌大賞、斎藤茂吉短歌文学賞などを受賞。96年に文化功労者。

【投稿用紙】

所定の用紙(コピー可)を使用してください。
投稿用紙は、NHK学園のホームページからもプリントアウトできます。
応募は1人1組に限ります。どなたでも応募できます。

- 投稿作品は、15首とも自作で未発表作品に限ります。
- 既発表作品・二重投稿(同一作品及び酷似作品を新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・コンクール・インターネット・結社誌・同人誌等へ投稿や、ホームページ・ブログ等に掲載)は、固くお断りします。
- 15首中に既発表作品、二重投稿、酷似作品があれば、無効となります。

【投稿作品】

新作15首を1組とし、募集します。
テーマは自由です。表題(タイトル)をつけてください。

【投稿締切】

令和元年9月30日(月)消印有効

【投稿料】

1組15首 5,000円(1人1組に限る)

【送金方法】

自由題・題詠の部と同様に、郵便為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購入)、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください(切手の代用は不可)。
口座番号: 00180-2-357944
加入者名: NHK学園 短歌大会事務局

【選考】

15首を1組として一次選考、最終選考を行い、入選・奨励賞・選者賞・近藤芳美賞を決定します。
入選が内定した作者および受賞が内定した作者には、12月上旬に文書でお知らせします。

【賞】

- ◆ 近藤芳美賞……選者の合議による最終選考を経て、1組(15首)を決定。
 - ◆ 選者賞……各選者1組を決定。
 - ◆ 奨励賞……各選者2組を決定。
- 近藤芳美賞は、NHK全国短歌大会(NHKホール)ステージで発表します。

【発表】

入選作品は、大会当日(令和2年1月25日)発行の「NHK全国短歌大会入選作品集」に表題と名前、作品の一部を掲載し発表します。なお、投稿者には作品集を1冊お渡しいたします。
全入選作品は、NHK学園ホームページに掲載します。

【投稿先】

NHK全国短歌大会事務局
〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 NHK学園内

選者



岡井 隆
『未来』編集・発行人



栗木京子
「塔」選者



篠 弘
『まひる野』代表



前回のステージから



前回の入選作品集